

—一級河川加古川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

野 村 構 居 跡

平成3年度

兵庫県教育委員会

—一級河川加古川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

の 野 村 構 居 跡



平成 3 年度

兵庫県教育委員会



例　　言

- 1、本書は、兵庫県社土木事務所の実施する「一級河川加古川河川改修工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査及び出土品整理事業の報告書であり、兵庫県社土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
- 2、本書に関わる埋蔵文化財は、西脇市野村町字カマエに所在する「野村構居跡」である。
- 3、全面調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の西口和彦、種定淳介、別府洋二、村上賢治が担当し、株式会社広田組に作業委託した。
- 4、出土品整理事業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
- 5、科学探査にあたっては、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長 西村康氏に現地指導並びに解析の指導を受けた。
- 6、本書に使用した挿図、写真の内、第1図の地図は国土地理院作成の1/25000地形図「西脇」を使用、また図版1の航空写真は国土地理院作成、日本地図センター発行のものを使用した。また第29図の地形図は西脇市提供のものをもとに作成した。
- 7、写真団版で使用した遺跡の航空写真是写測エンジニアリング(株)に、出土遺物の写真是株式会社サンスタジオに委託した。その他の写真是発掘調査担当者が撮影したものである。
- 8、本書の執筆分担は、第5章を西口が、その他は別府が担当した。また、編集作業は中筋貴美子の補助を得て、別府がおこなった。
- 9、本遺跡から出土した遺物及び写真等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて保管している。
- 10、岡田章一氏、小林基伸氏、堀田浩之氏を始めとした兵庫県立歴史博物館の皆さんには様々な御教示をいただいた。また、発掘調査の際には西脇市教育委員会岸本一郎氏の協力を得た。記して感謝を表します。

目 次

頁

第1章 調査に至る経緯とその経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の体制	2

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3節 周辺の遺跡	6

第3章 遺構

第1節 調査の概要	7
第2節 遺構	10

第4章 遺物

第1節 土器	19
第2節 土製品	31
第3節 石製品	32
第4節 金属製品	42
遺物一覧表	45

第5章 科学探査

野村構居跡の科学探査	49
------------------	----

第6章 まとめ

図版目次

- 卷頭カラー 調査地全景（北から）
- 図版1 航空写真
- 図版2 遺跡 野村構居全景（南から） 野村構居全景（東から）
- 図版3 遺跡 調査地全景（南から） 加古川対岸からの遠景
- 図版4 遺跡 調査地全景（東から） 野村の滝と調査地
- 図版5 遺構 調査地南端大堀状落ち込み 寛永通宝出土状況 溝断面
- 図版6 遺構 石垣 階段状の石組
- 図版7 遺構 堀全景 北堀断面 南堀断面
- 図版8 遺構 北堀全景 北堀（北から）
- 図版9 遺構 南北の堀と入口周辺 石組 石列 堀間の暗渠 柱穴
- 図版10 遺跡の周辺 主郭部（南西から） 主郭部に建つ妙見堂
神社裏の供養塔 上原氏・有田氏供養塔
主郭部南の堀推定地（西から） 主郭部南の堀推定地（東から）
主郭部西の堀推定地（南から） 船着場
- 図版11 遺跡の周辺 南西段丘端の祠 南東段丘端の祠
主郭部南西の祠 主郭部北東の祠
電気探査 測量 北堀断面土層転写
- 図版12 遺物（土器）
- 図版13 遺物（土器）
- 図版14 遺物（土器）
- 図版15 遺物（土器）
- 図版16 遺物（土器）
- 図版17 遺物（土器）
- 図版18 遺物（土器・瓦）
- 図版19 遺物（石製品）
- 図版20 遺物（石製品）
- 図版21 遺物（石製品）
- 図版22 遺物（石製品・土製品・銭）
- 図版23 遺物（鉄製品）

挿図目次

第1図 野村構居の位置とその周辺	4
第2図 調査前現況図	8
第3図 調査区全図	9
第4図 溝土層断面図	11
第5図 石垣平面図・側面図	12・13
第6図 北堀土層断面図及び暗渠断面図	15
第7図 南堀土層断面図	16
第8図 石組	17
第9図 石列	18
第10図 堀下層出土の土器(1)	20
第11図 堀下層出土の土器(2)	21
第12図 堀上層・柱穴出土の土器	23
第13図 大堀状落ち込み出土の土器	24
第14図 溝出土の土器	26
第15図 拡張盛土下層出土の土器	27
第16図 拡張盛土上層出土の土器	29
第17図 表土他出土の土器	30
第18図 瓦・土製品	31
第19図 石製品(1)	34
第20図 石製品(2)	35
第21図 石製品(3)	36
第22図 石製品(4)	37
第23図 石製品(5)	38
第24図 石製品(6)	39
第25図 石製品(7)	40
第26図 石製品(8)	41
第27図 金属製品(1)	43
第28図 金属製品(2)	44
第29図 電気探査範囲図	50
第30図 野村構居主郭部全体図	56

第1章 調査に至る経緯とその経過

第1節 調査に至る経緯

水上郡水上町水分れにその源を発する加古川が、西脇市街に入り杉原川と合流する地点より約300m南に野村橋がある。この橋から下流数百メートルにわたって、昔から野村の滝と呼ばれる川底が浅く幅員の狭小な箇所があり、雨期の増水時には危険な地区となっていた。そこで兵庫県社土木事務所では、この野村町において加古川の改修工事を計画した。しかし、工事予定地内に周知の埋蔵文化財である「野村構居跡」の一部が含まれることが判明したため、急速平成元年4月に兵庫県教育委員会とその取扱いについての協議を行った。

第2節 調査の経過

協議の結果、事前の範囲確認調査を実施することとなり、県教育委員会は平成元年6月26日から7月4日にかけて、野村橋から新野村橋にかけての約200mの区間で確認調査を実施した。合計8箇所にトレンチ及び断面観察用のグリッドを設定して調査を実施したところ、野村橋から約80mまでの部分で堀状の落ち込みや土壘状の盛土を確認、16世紀代の遺物を検出した。南半部分の新野村橋付近の2ヶ所のグリッドでは若干の遺物は出土しているものの、後世に土と共に持ち込まれた可能性があり、また造構も確認されなかったことから全面調査対象外となった。

全面調査は平成元年11月27日から平成2年2月15日にかけて行われた。その結果、確認調査で予想された堀は、調査区内で南北に分かれており、西へ屈曲する部分は検出できなかったものの、構居主郭を囲む東側の堀のほとんど全体を確認することができた。また、確認調査で予想された土壘状の盛土は、堀の外側にあり、川にむけての平坦地を拡張するための盛土であることが判明した。調査区南端の濠状の落ち込みも直接構居に関連するものとは考えにくい。確認調査で数点採集されたチャート製の剝片は人為的なものか判別ができず、また全面調査では検出できなかったため、旧石器時代の遺跡は調査区内には存在しないようである。

調査で検出された溝や包含層の遺物の在り方から、この地は構居がその機能を失って後も、何らかの建物が建てられ生活の場となっていたことが判明した。

部分的な発掘調査では、当然ながら構居の全体像を把握することは不可能であるため、野村構居の全体像に少しでも近づくよう、奈良国立文化財研究所・埋蔵文化財センターの協力を得て調査区外の一部分で科学的探査を実施した。

第3節 調査の体制

発掘調査事業及び本報告書作成に関わる整理事業に係る体制は以下の通りである。

確認調査（平成元年6月26日～7月4日）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	大江 剛		
副所長	才木 繁	副所長兼調査第2課長	村上絃揚

〔発掘調査担当〕

調査第1課主査	大平 茂	同技術職員	中川 渉
---------	------	-------	------

全面調査（平成元年11月27日～平成2年2月15日）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	大江 剛		
副所長兼調査第2課長	村上絃揚	副所長	才木 繁
所長補佐兼調査第1課長	大村敬通		

〔発掘調査担当〕

調査第1課 主 査	西口和彦	補助員	小谷五郎
調査第1課 主 任	種定淳介	補助員	小谷義男
整理普及課 技術職員	別府洋二	補助員	西本寿子
調査第2課 技術職員	村上賢治		

整理作業（平成2・3年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	内田隆義		
副所長（平成2年度）	村上絃揚	副所長（平成3年度）	駒井 功
整理普及課長	松下 勝	同課長補佐	小川良太
同主任	岸本一宏		

〔整理担当〕

整理普及課 主 査	岡崎正雄	同主査（金属器保存処理）	加古千恵子
同 主 任	別府洋二		
嘱託職員	中筋貴美子	岡崎輝子	前田千栄子
	岡田依理子	茨木惠美子	尾崎比佐子
	植田弥生	松村 鶴	杉本淳子
	松本美千代	鈴木 聰	水谷幸子

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

野村構居跡の所在する西脇市は、兵庫県の内陸部に位置し、ちょうど東経135度、北緯35度の経緯度が交わる「日本のへそ」の町として有名である。西脇市域は、中国山地から南方の播磨平野へ移る地形の変換点に当たっており、播磨・丹波・但馬の三国の接点に位置している。

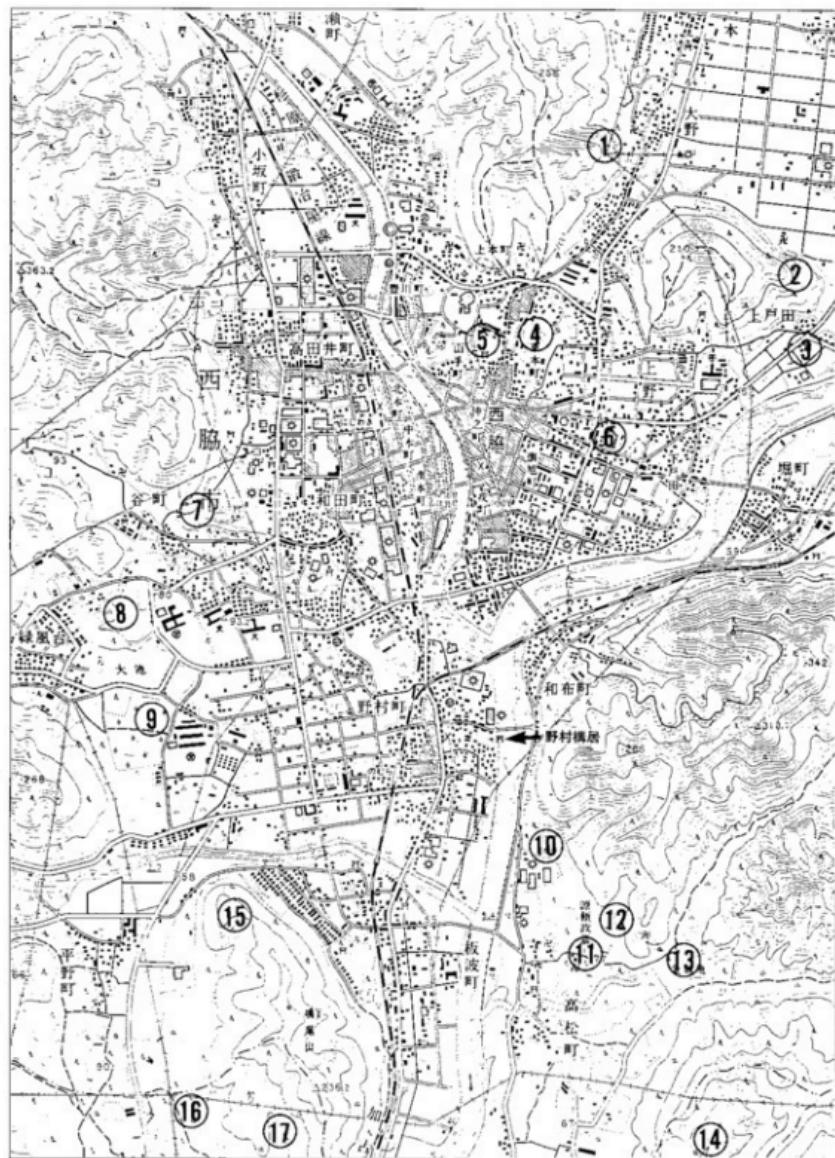
また、瀬戸内海へと流れる加古川の上流域にあたり、さらに遡った氷上郡氷上町石生では日本一低い分水界を経て、竹田川から由良川へと続き日本海へ繋がる。この由良川・加古川のみちは、播磨と丹波・丹後を結ぶのみならず、古くから瀬戸内と日本海側との文化の動脈となっていた。

野村構居の北約200mの地点で加古川と合流する杉原川は、中町をとおり、奈良時代から生産されていたという「杉原紙」で有名な加美町へと通じている。また、野村構居の南約1kmで加古川と合流する野間川の谷を西へ抜けると加西市、川を遡ると八千代町へと続く。加古川本流は野村構居の横の「野村の滝」と呼ばれる急流を通りて南流し、一旦東西の山に挟まれた谷を抜けて、滝野・社といった中流域の段丘平野へと流れる。西脇の町はこれらの四つの大きな谷の合流する地点として発展した。

西脇の町は段丘面の可耕地をその生産の基盤としているが、それよりも播州織物や釣針、和紙などの商品をつくり出し、また高瀬船による河川交通を中心とした中継地として発展を遂げたと言えよう。

野村構居のある野村町も、山で囲まれた西脇の町の南半部にあり、南北東と三方を前述の加古川・杉原川・野間川といった河川で囲まれた位置を占める。その中で野村構居の立地は北西から南東に伸びる段丘の先端部に位置しており、野村の滝を形成する断層に乗っている。

野村構居は周囲を山で囲まれた中の、さらに三方を川が流れる自然の要害地を占めるのと同時に、播磨・丹波・但馬を結ぶ交通路の要衝に位置している。しかしながらこの野村構居を構えた勢力も、後述のとおり文献史等では名を残さず、大きな力を持ち得たとは言えず、歴史の中に埋もれ、そして文字通り土の下に埋もれていったものと思われる。



第1図 遺跡の位置とその周辺(1/25,000)

第2節 歴史的環境

発掘調査の行われた「野村構居跡」は、現在の行政区画では兵庫県西脇市野村町カマエに所在する。中世には播磨国多可郡道田荘重国郷に属しているが、この道田の地名は8世紀前半に成立したと考えられる「播磨國風土記」の託賀郡法太里に通じる。

承平年間(931~938)に成立した「和名抄」には多可郡道田郷として見え、康平2年(1059)7月20日の播磨国東大寺領畠注進状によれば「多可郡東条郷野村畠三町」が東大寺領であったとされる。

道田荘は、寿永3年(1184)4月5日の源頼朝下文案に見え、平家没官領のうち池大納言平頼盛に変換された荘園17ヶ所のひとつであった。当荘の成立事情は未詳であるが、当荘の本家は皇室(得長寿院)で12世紀になって領家職を有した平氏の支配下に入ったと見られる。

寛喜元年(1186)には領家職は平家から久我家に移り、鎌倉幕府から守護使不入の特権を得ていた。元弘3年(1333)6月9日久我家は後醍醐天皇から当荘を安堵され、さらに暦応元年(1338)10月20日足利尊氏から当荘地頭職を宛行された。しかし、南北朝内乱のなかで、石塔頼房が地頭職を掌握し、その代官加藤七郎左衛門尉・石田少納言坊らが現地を支配しつづけた。室町幕府は貞和5年(1349)に地頭職打渡しをおこなわせている。観応元年(1350)4月、当荘内東条郷の公文堯觀法師と子息大和房が荘内に乱入り、城郭を構えて悪党行為を働いたため、足利尊氏の命を受けた赤松範資は、同年7月城郭を破壊し、悪党人を追却している。久我家は地頭代官職を守護赤松則祐に宛行ったと思われ、永和3年には守護請が成立している。同荘内の重国郷は応永26年(1419)4月19日の足利義持御判御教書写によれば、清和院領として安堵されている。その後も永享3年(1431)3月5日足利義教、長録2年(1458)8月10日足利義政、延徳3年(1491)8月24日足利義稙が清和院領として安堵している。同荘は戦国期にも存続したが、羽柴秀吉の播磨制圧(1580前後)により消滅した。

江戸時代に入ると、慶長5年(1600)からは姫路藩領となり、寛永16年(1639)には幕府領、続く延宝6年(1678)には幕府と下總国佐倉藩の相給、貞享3年(1686)幕府・柏原小田原藩の相給、寛保2年(1742)三草藩・小田原藩の相給、延享3年(1746)からは三草藩と一橋藩の相給であった。

近代に入り明治22年から昭和27年までは、多可郡重春村野と呼称されている。この重春の地名は重国郷と春日郷の頭文字による。調査地点から南数百メートルに当時の役場が設置され、播州織を中心に著しく発展した。現在でも紡織工場や大きな土蔵をもつた屋敷が見られ、往時の繁栄を思い浮かばせる。

第3節 周辺の遺跡

野村構居近辺の平地では、これまであまり遺跡は確認されていないが、今回の確認調査の際に出土したチャート片や、弥生土器片など、近辺にさらに古い時代の遺跡の存在を示している。また中世や近世の集落跡等、文献ではわからない埋もれた歴史がこれから発見される可能性がある。

周辺では山塊に遺跡が集中しており、加古川と杉原川に挟まれた山塊には、①大野群集墳、②東八日山古墳、③上戸田遺跡、④大塚古墳、⑤童子山窯跡、そして⑥西脇城跡などがある。また、杉原川と野間川に挟まれた山塊では、ちょうどその先端に野村構居が乗る段丘の付け根や谷部に、⑦谷窯跡、⑧大池遺跡、⑨上ノ段遺跡、などが分布している。野村構居から加古川を挟んだ対岸の山塊には、⑩高松群集墳や⑪頼政墓所古墳、などの古墳群と、⑫石ヶ谷窯跡群や⑬金城池窯跡群、⑭鍋子谷窯跡群、などの古窯跡群が集中している。

野間川と加古川に挟まれた鳴尾山は独立した山塊であるが、その北端に位置する⑮鳴尾山城は野村構居の詰めの城として考えられているが、その直線距離は約1.3kmと離れており、また西方山裾には「土井下」の地名がありここ対になるものかも知れない。この山塊の南西側には⑯ぬか塚窯跡、⑰鷺谷窯跡が存在する。

参考文献

- 『兵庫県史』 兵庫県
- 『西脇市史』 西脇市史編纂委員会、昭和58年
- 『兵庫県人百科事典』 神戸新聞出版センター、昭和58年
- 『兵庫県地名大辞典』 角川出版 昭和63年
- 『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』 兵庫県教育委員会 昭和56年度
- 『西脇・多可の歴史と文化』 兵庫県立歴史博物館特展図録No.8、兵庫県立歴史博物館、昭和60年
- 『西脇・多可』 兵庫県立歴史博物館総合調査報告書II、兵庫県立歴史博物館、昭和62年
- 『ハゼノ木遺跡』 西脇市埋蔵文化財調査報告書2 西脇市教育委員会 昭和60年度
- 『播磨・綠風古窯址』 西脇市埋蔵文化財調査報告書1 西脇市教育委員会 昭和57年度
- 『下戸田古墳群発掘調査概要報告書』 西脇市教育委員会 平成元年度
- 『上ノ段遺跡の調査』 西脇市教育委員会 平成2年度
- 『播磨・吉馬』 吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会 平成2年

第3章 遺構

第1節、調査の概要

確認調査の結果を受けて、全面調査を実施した地区は、ちょうど野村構居主郭部と推定される部分の東端部にある。主郭部推定地には上原神社妙見堂が建っており、お堂の裏手には、近世に建立された有田氏・上原氏の供養塔や一字一石経塚が見られる。妙見堂の敷地の四周は一段低くなっている、民家や細長い田畠となって、方形に堤が巡ることが想定される。更に周辺部は既に民家等が建ち並んでいるため主郭部以外の構居跡の復元は困難である。

調査区の東端は加古川に向けて約6mの崖となっており、発掘調査ではその崖の上端を検出している。加古川の河床は岩盤であり、発掘調査でも北半では東端で岩盤を検出している。岩盤の上には疊層、そして極細砂層が乗っており、その面を地山ベース面としている。

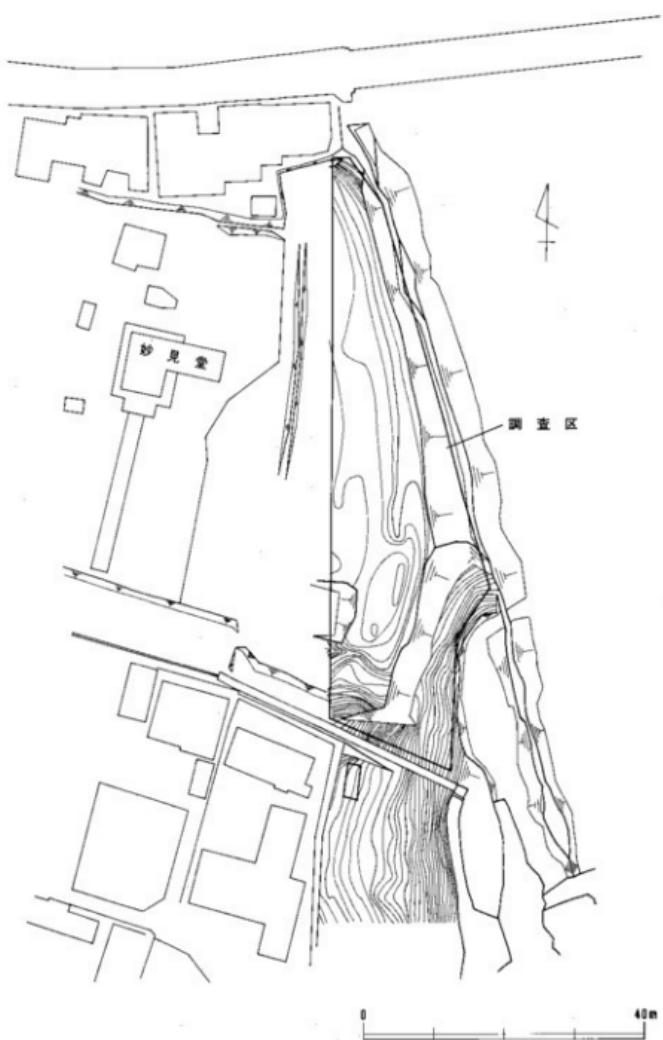
調査区南端の現排水溝の部分は、確認調査の際に堆と考えていたため大堀状落ち込みと呼称している。排水溝を残したままの調査となつたため、深さ約5mで調査を完了したが、排水溝敷設の際の掘り込みが大きく、また調査最深部でも近世以降の遺物が出土している。(第13図)

調査区南東端の崖の下も、底を検出するまでには至っていない。崩れた崖の堆積物の下層は河川による堆積となっている。ここからは遺物は全く出土していないが、おそらく野村の滝と呼ばれる河川底が岩盤となった地点に、船入りを設けた際に掘削されたものであろう。調査区外の加古川に面した部分には、岩盤を掘削して河川に対して斜めに掘削を設けている。船着場であろうか。

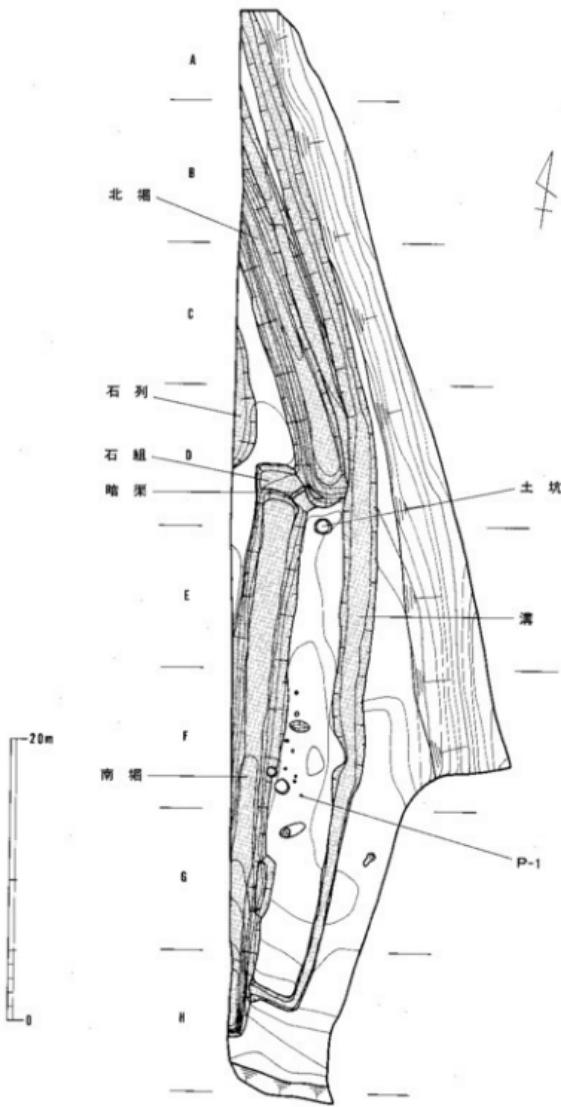
全面調査区外の南側に設けた幅1.5m、長さ5mのトレンチでは、約1.5mまで掘り下げたが、疊混じりの搅乱層で遺構・遺物とも見られなかった。この部分は後世にかなり手が加わっているようである。

調査地点の調査前の状況は雑木林であり、腐植土や樹木の根がはびこっていた。そのため発掘調査では表土掘削を重機によって行い、それ以下を人力によって掘削を進めた。

調査区内の西側は、淡黄褐色極細砂のベース面で遺構を検出したが、東側は遺物を含んだあまり縮まりのない土層が川に向かう斜面に盛られていた。これを拡張盛土と呼称している。



第2図 調査前現況図



第3図 調査区全図

第2節、遺構

発掘調査で検出できた遺構には、溝、石垣、堀、石列、土坑などがある。

溝（第4図）

調査区の北端から地形に沿って約72m延び、南端でやはり地形に沿って西に約4m直角に折れて調査区外へ出る。南側の約15mは地山面を掘り込んでいるため、幅が狭く、箱掘り状に掘削されている。北側の部分は拡張盛土を掘り込んで作られているため、上幅約2m、深さ約1mと規模を大きくしている。特に北端部では石垣のすぐ内側を沿うかたちで掘削されている。溝の深さは0.5~1mを測る。

土層は、土壤化した下層と人為的に埋められたと思われる多量の遺物を含んだ淡黄色細砂の上層に大きく分けられる。遺物の中にはガラス瓶やランプなども含まれており近代に埋められたものである。

石垣（第5図）

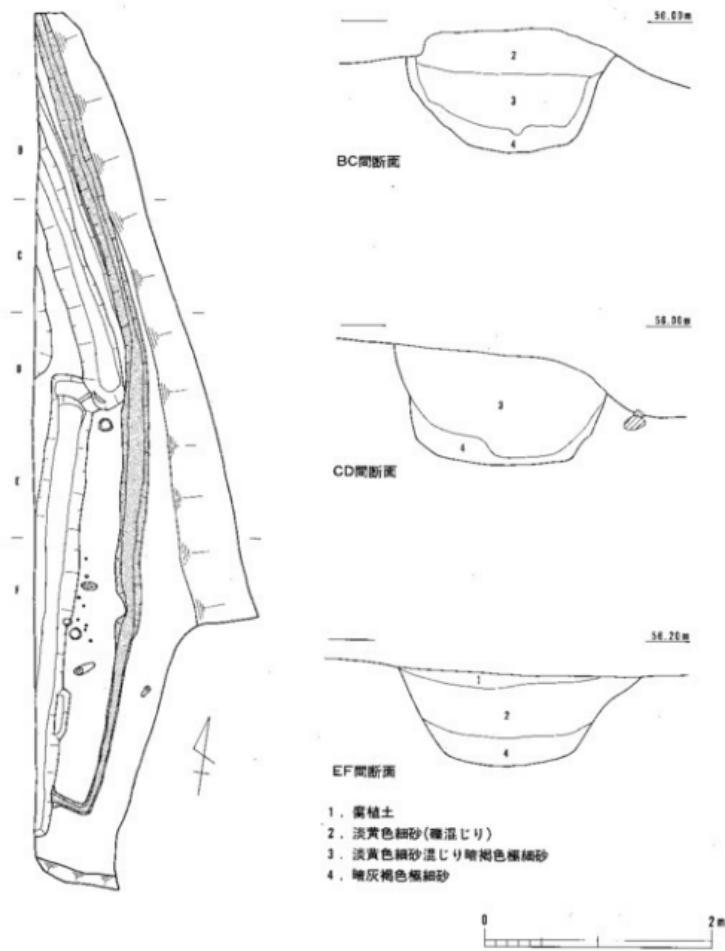
加古川の崖の沿って約44mの長さで築かれている。石垣の築かれている部分はちょうど拡張盛土の範囲と一致しており、また加古川への斜面の上端にある。

この拡張盛土は、淡黄褐色極細砂や岩盤をベース面とした加古川への斜面上に乗り明確な分層発掘ができなかったため、便宜的に石垣検出までを上層、石垣より下の層を下層として遺物の取上げ等をおこなった。

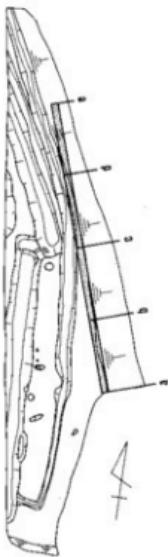
石垣の高さは最高でも約50cmで2~5段の石を積み上げている。使用している石には約55cm×25cmの大きなものから拳大の割石や石臼破片も使用しており、東側に面を描いて小さな石は小口積みに、大きな石や板状の石は横方向に積んでいる。南端は崖で途切れている。

崖から約2mの地点には、石垣の上方に階段状の石積みが見られ、約0.7mの幅で約1.5mの長さに2列の石を並べ、さらにもう一列北側に並べている。高さは石垣の下からでも50cmを越えないものである。この部分の石材には第25図129の台石が使用されていた。

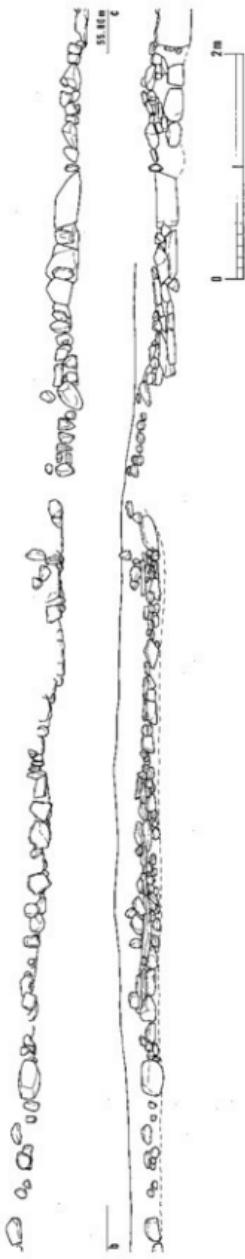
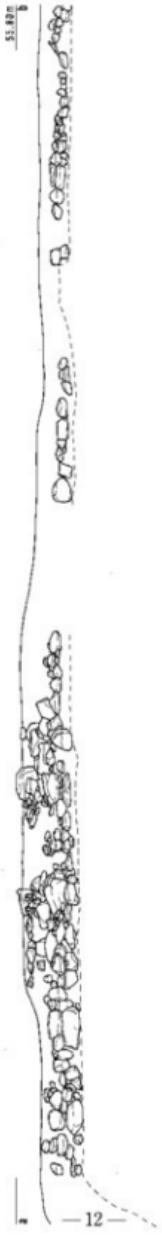
この石垣は、加古川への斜面に盛土を行って平地を拡張した西端に設けられており土留めの機能を有するものであろう。この石垣横の松の木の根本から寛永通宝が38枚出土していることから、石垣及び拡張盛土は近世に築かれたものと考えている。



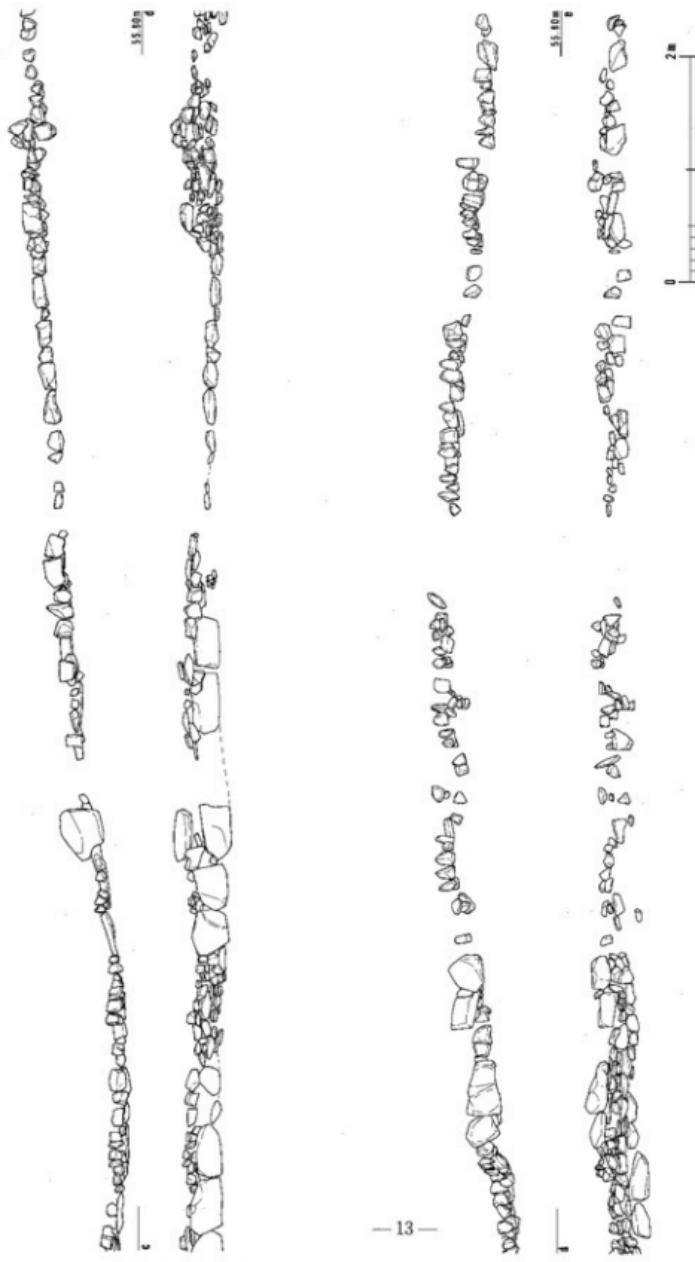
第4図 溝土層断面図



Ulmus
a decurrent leaf



第5图 石块平面图·剖面图



調査区の西半では、南北方向の堀が端部を接するかたちで2条検出され、各々を北堀、南堀と呼称している。

北堀 (第6図)

北堀は約30mの長さで検出され、地形に沿って角度をやや西に振る。溝によって東側を削られているが、全幅は4.5mを越える。深さは1.2m~1.5mを測り、南側がやや深くなる。堀内の東側には幅約1mの段を作り出している。段の部分を除いた堀の断面形態は、北半では「V」字形を呈しており、この部分は底まで淡黄色細砂ベースを掘り込んでいる。南半では「U」字形を呈しており、この部分の堀底は礫層のベースを掘り込んでいる。埋土は2層に大別でき、上層はベース土層に類似した淡黄色細砂のブロックを含むもので、下層は土壤化した黒褐色シルト質極細砂層である。北端の堀底からは炭化した長さ50cm程の板状の木片が検出された。また南端の堀底では拳大の石や石臼片に混じて炭片や骨片が散乱していた。

南堀 (第7図)

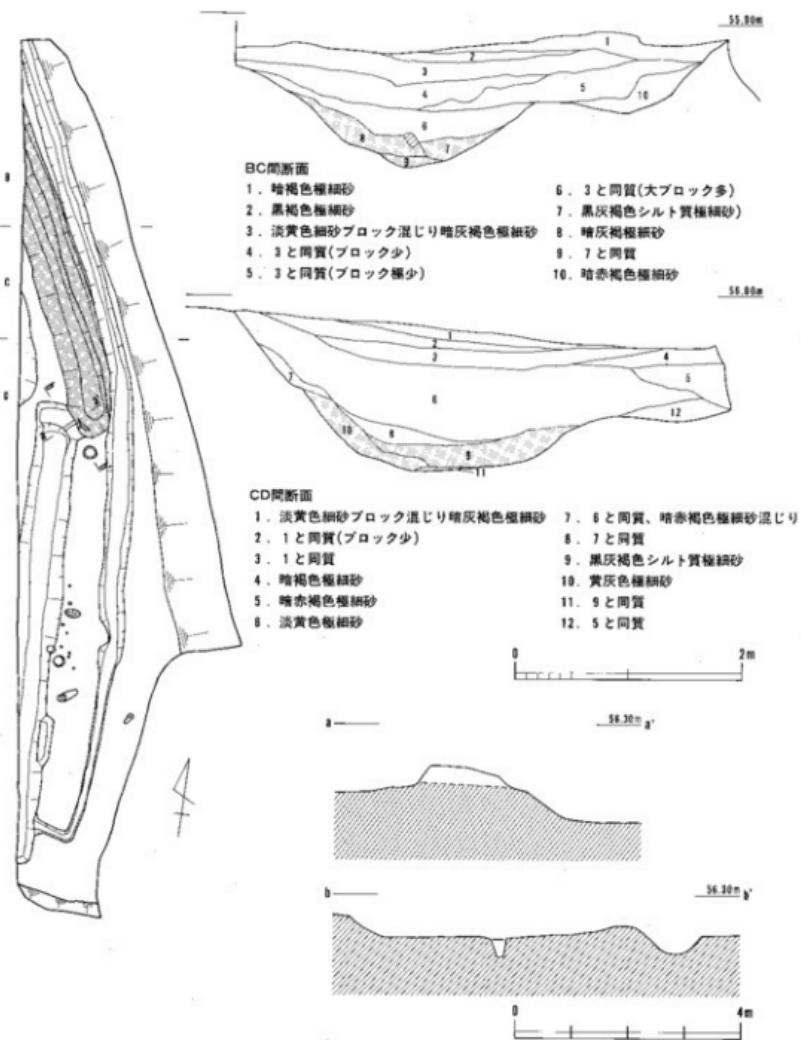
南堀は北堀南端の西側に接した位置からほぼ南の方向に約41mの長さで掘られている。この堀の南端は西向きに屈曲するようである。幅は3.8m~4.5mで、その断面形態は「U」字形を呈する。深さは1m弱で、堀底は礫層のベースまで達しているが、北堀南端のように掘り抜いてはいない。堀底のレベルは北端が最も深くなる。堀内の埋土の状況は北堀と同様に大きく2層に分けることができる。下層には拳大の石が部分的に含まれる。

入口

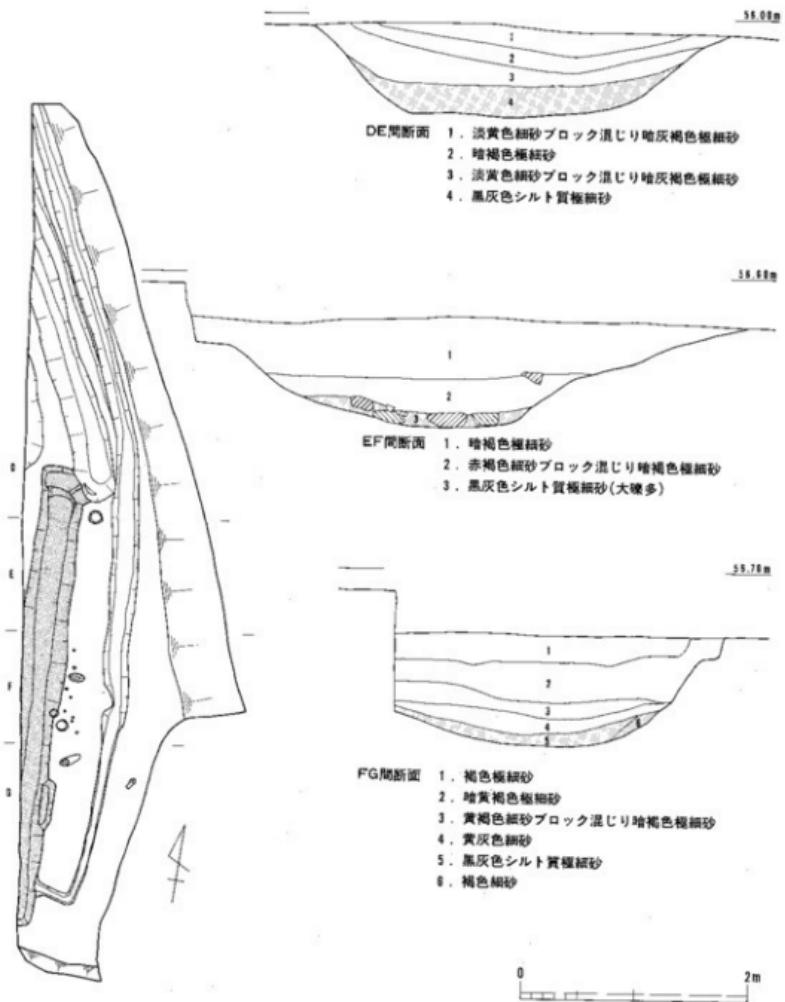
南堀の北端は堀底から約60cmの高さに幅約1.5mの段が設けられている。南北の堀の間はこの段と同じ高さで、上面約65cm、下約1mの幅で残されており、その上面は小礫混じりの土で固められている。この部分は東側の入口であろう。

暗渠 (第6図)

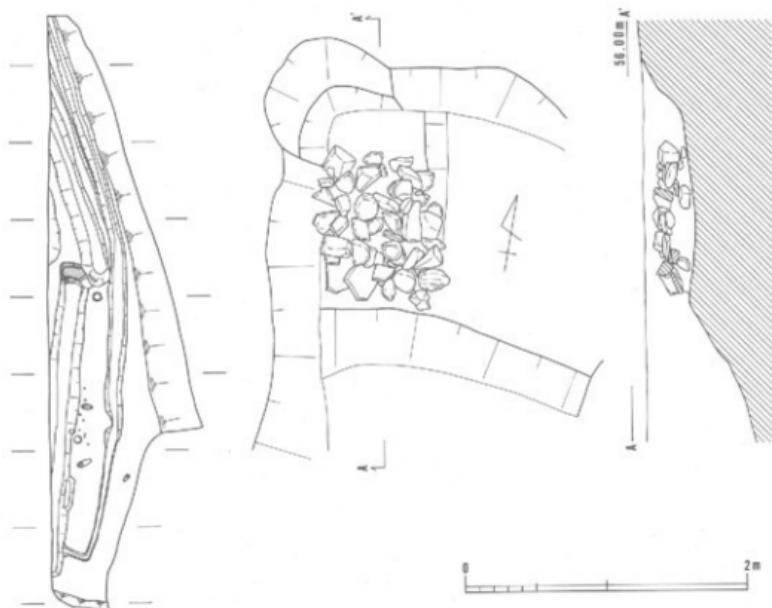
この土橋状の入口の中央には南北の堀をつなぐ小溝が掘られている。その規模は上幅約28cm、深さ約35cmを測る。この小溝の埋土は堀の埋土とは異なっており、上面は小礫混じりの土で固めてあるため暗渠であったと思われる。この部分では北堀が南堀より約50cm深い。暗渠は南堀のほぼ底の深さまで水平に掘削されている。この暗渠からは第27図145の刀子が出上している。



第6図 北塙土層断面図及び暗渠断面図



第7図 南堀土層断面図



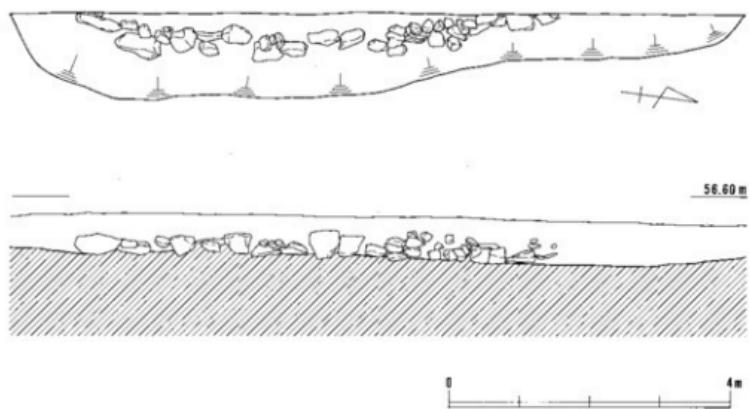
第8図 石組

石組（第8図）

南堀北端の段上に、堀の西壁に沿って約1m四方の石組が作られている。革大の割石を使用して、乱雜に高さ約30cmまで積み上げており、下部は石混じりの暗褐色の細砂を盛っている。

当初北堀の南端下層から骨片や炭の散乱が見られたことから、火葬場ではないかと考えていたが、石組の下からは掘り込み等の遺構は検出されず、また石組内やその下層からは遺物・骨片とも出土しなかった。

さらにこの石組から土橋状の入口を挟んだ外側には、直径約1.2m、深さ約45cmの播鉢状の土坑が検出されたが、ここからも遺物は出土していない。この石組及び土坑は構居入口に伴う施設であろう。



第9図 石列

石列（第9図）

北堀の西側3mの調査区端で、約7mの長さでやや湾曲して築かれた石列を検出した。ベース面からわずかに盛んだ部分に、大小の割石を1～3段に高さ約40cmまで積み上げている。

現地表面から約30cmの深さで重機掘削時に検出されたため、上面は削平されている可能性がある。石は東側よりも西側の面で石の長軸面が揃っており、西側つまり構居の内側を正面として築いたものと考えられる。遺物は出土していない。

この石列は、所属時期は不明であるが、北堀との間に何らかの構築物があったことを示している。北堀に並行して積まれていること、堀埋土上層が人为的に多量の地山ベースと同質の土で埋められていることから、土星の存在を推定し、その基底の石列であると考えている。

その他の遺構

南堀中央部の西側の平坦地にいくつかの小柱穴や土坑が認められたが、建物跡などを復元できるものではない。ほとんどが淡黄色細砂のベース面を掘削しているが、一部に堀埋土を切り込んでいるものもあり、構居に伴わない後世のものもあると思われる。遺物はわずかにP-1から第12図29の備前焼壺口縁部破片が出土したにすぎない。

第4章 遺物

発掘調査で出土した遺物は、南北堀・溝・ピット・大堀状落ち込み及び、包含層から出土しており、土器・瓦・土製品・石製品・銅製品・鉄製品などがある。遺物は種別毎に掲載しており、また土器に関しては、南北の堀出土のものを上層・下層出土の2つに分けた。包含層も石垣検出までの拡張盛土上層と石垣より下層の拡張盛土下層及び、機械掘削時出土の表土及び廃土等の表面採集のものに分けて掲載している。

第1節 土器 (第10図～第17図)

堀下層出土土器 (第10・11図 1～17)

堀下層から出土した土器には、土師器鍋、須恵器椀、丹波小甕・擂鉢、備前擂鉢・大甕、青白磁瓶がある。これらは、全て破片で出土しており、完形もしくは完形に復元されるものはない。

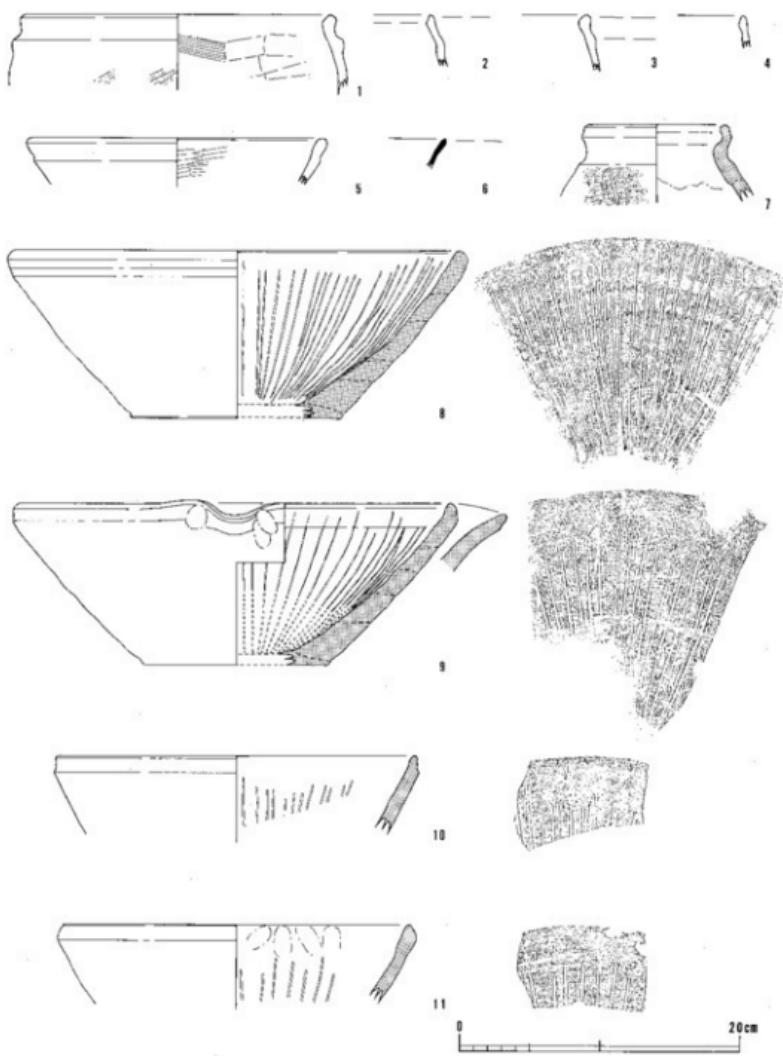
1～4は土師器鍋であり、外面に煤が付着する。1には不明瞭な鈎が口縁部下に残る。外面に左下がりの平行タタキで成形した跡を残し、口縁部及び鈎の上下をヨコナデで調整している。内面には横方向のハケ及び工具による強いナデを残し、口縁端部はヨコナデで仕上げている。2・3は内外面ともナデによって仕上げているが、外面には2段の強いナデを施しその間を鈎状に残す。

5は土師器の鉢と考える。外面の口縁部下を強くヨコナデしてくぼませる。内面は横方向の粗いクシ状の調整があたっている。

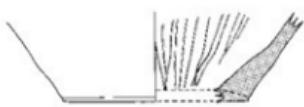
6は須恵器椀の口縁端部である。ヨコナデを施し、重ね焼の痕跡が見られる。

7は丹波焼の小甕の口縁部で、外面をナデによって立ち上がらせ、更に内面に蓋受け状の段を作り出して口縁端部を成形している。肩部には「×」の手印が見られる。断面には粘土紐積み上げの痕跡が見られる。外面及び口縁部内面には自然釉がかかっている。

8～14は丹波焼擂鉢である。8・9・12～14には底部の粘土板上に粘土紐を積み上げた痕跡が見られる。8では底部から体部への外側に粘土を縫ぎ足して補強した痕跡が見られる。また12・13では内側に同様の粘土縫ぎ足を行っている。積み上げた粘土はユビオサエで成形され、布か皮のようなものでナデ消されている。8・14では底部周辺の粘土の余りを工具によって削り取っている。ナデは、内外面とも不定方向のヨコナデによるもの(10・12)、内外面とも全周を巡るヨコナデを施すもの(9・11・13)、内面と外面の口縁部から下3～4段に全周を巡るヨコナデを施し外面の大半を不定方向のヨコナデで仕上げるもの(8)がある。口縁端部は9・10のように内外の対応する位置に強いヨコナデを施して窪ませるものと、端部内面の一段下を窪ませる



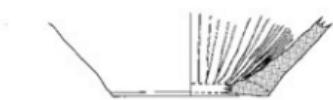
第10図 堀下層出土の土器(1)



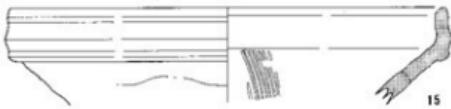
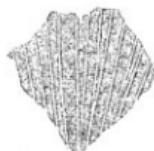
12



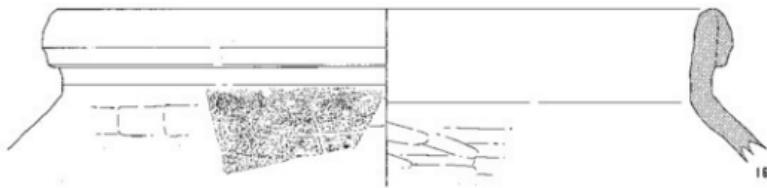
13



14



15



16



17



第11図 堀下層出土の土器(2)

もの（11）がある。卸目は前者では窪みの下端まで、後者では上端まで施されている。卸目は全て籠描き一本引きで施されている。9・12～14の底面は灰色を呈しており、灰をかけたものと思われる。9には片口が見られ、口縁部をナデた後で指で作り出している。8・9の外面には煤が付着している。

15は備前焼擂鉢である。口縁部が大きく上方に拡張し「く」字形を呈し、内面に凹部をもつ。16は同じく備前焼大甕で、その口縁部は折り返して幅の広い玉縁状を呈している。肩部外面は板状工具によるナデ。肩部に窯印を持つ。

17は中国製と思われる青白磁瓶の底部である。底部及び内面は露胎である。外面には段とその下方に1条の沈線が施される。内面の底部と体部との境は工具によって粘土を削り取って明瞭となるが、全周には及んでいない。外面の段に対応する位置にやはり段をもつ。

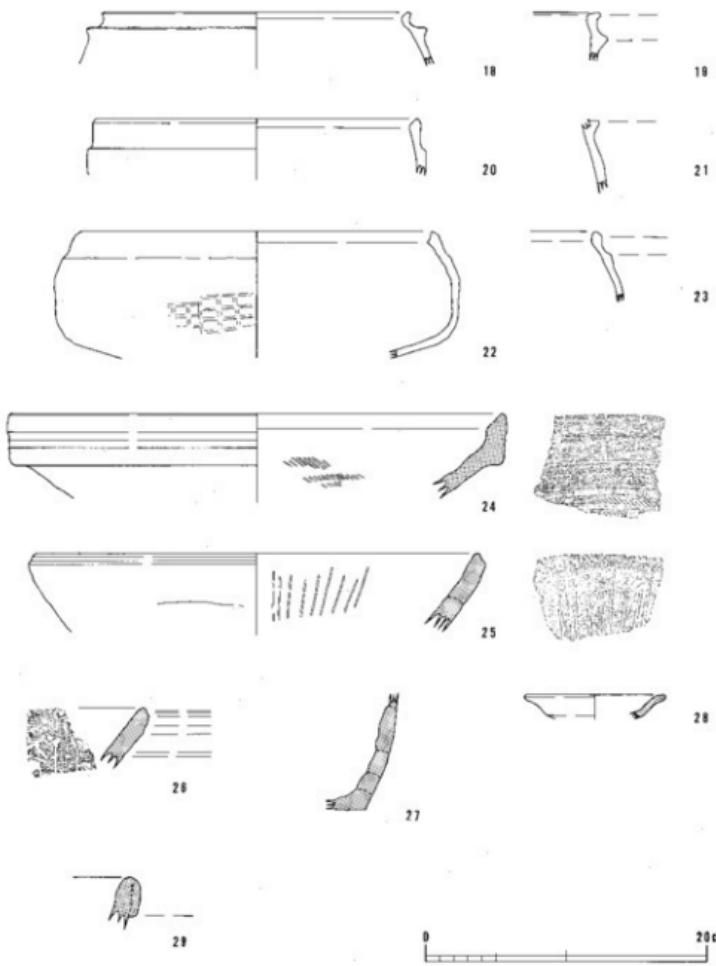
堀上層出土土器（第12図 18～28）

堀上層には遺構ベース面となる黄褐色シルトのブロックが混じっており、人为的に埋められたものと考えられる。ここから出土した土器には土師器鍋・備前焼擂鉢・丹波焼擂鉢・丹波壺・瀬戸美濃皿がある。

18～23は土師器の鍋である。この内18・19・22は硬質に焼かれている。18・19は南北の堀から出土しているが、ほぼ同一の作りをしている。張り付けの鈎を持ち、その上下を強いヨコナデによって仕上げている。口縁端部は外側に拡張して上部に面を持つ。内面はハケによって成形した後、ヨコナデで調整している。ヨコナデは端部の一段下を強く施して鈎の張り付けを補強している。20にも鈎状の段が見られるが、これは粘土を内側に積み上げてその部分をヨコナデによって調整している。21は内面に横方向のハケを残し上端及び外面はヨコナデで調整している。22は胴部最大径の部分に格子目のタタキを残しているが、底部は丁寧になで消し、口縁部はヨコナデによって仕上げている。口縁端部の一段下を強くナデて窪みを作る。内面はヨコナデで調整しており、端面を持つ。23は不明瞭だが左下がりの平行タタキを残す。外面の口縁部下を2段に渡って強くナデ窪ませ、その間を凸状に残す。内面は細かいハケ状のナデを施し、内側に面を持つ端部に繋がる。

24は備前焼擂鉢。口縁部の下端に粘土を締ぎ足して面を作り、そこに2条の凹線を施す。端部は斜め上方に面を作り、その下をわずかに窪ます。内面の卸目は籠描きでやや斜めに施されている。

25・26は丹波焼擂鉢。25は外面は不定方向のヨコナデを施し、口縁端部直下及び端面を強いヨコナデで窪ます。内面はヨコナデで口縁端部下に不明瞭な段を作る。籠描き一本引きの卸目はこの部分まで施す。26は土師質のものであるが、升波焼である。内外面ともヨコナデで仕上げるが、外面の口縁部端面中央・口縁端部下と更にその下に凹線状の窪みを持つ。



第12図 堀上層・柱穴出土の土器

27は丹波焼壺底部。内面に粘土紐積み上げ及びユビオサエの痕跡を明瞭に残し、不定方向のヨコナデで仕上げている。外面はナデ上げて仕上げている。

28は瀬戸美濃の小皿である。黄褐色の釉薬を施し、底部は釉をかき取っている。

柱穴出土土器（第12図 29）

南堀の東側からはいくつかの柱穴や土坑が検出されたが、遺物が出土したのはこのP-1のみである。備前焼壺の口縁端部であり、折り返して玉縁を呈している。

大壠状落ち込み出土土器（第13図 30～31）

調査区南端は現状でも約1m程の段をもっており、更にコンクリートの排水溝が設けられていた。落ち込みの最深部まで調査することができなかったが、近世から近代にかけての土器が少量出土している。図化したのは2点だけである。

30は丹波焼甕である。短く外反する口縁の端部は四角く納めている。内外面とも布状のものでナデで仕上げている。ナデにより口縁部上面に凹部ができる。全体に自然釉がかかっている。胎土は非常に砂粒の多いものである。

31は丹波焼擂鉢底部である。底面はわずかしか残っていないが、同心円状に櫛描きの鉢目を施し、同様の細かい鉢目を体部内面に引き上げている。



第13図 大壠状落ち込み出土の土器

溝出土の土器 (第14図 32~52)

32~36は土師器小皿である。全てロクロを使わずに作られており、ユビオサエの跡を明瞭に残す。

37~39は土師器焰焰である。非常に薄く作られており、型によって成形されたものと思われる。口縁端部はナデによって丸く仕上げている。

40は瓦質の火鉢で、外面口縁部下に横向きに「・・平一五・・」と型押される。

41は柿釉を施した陶器小皿である。底部には糸切りを残し、全体に煤が付着している。燈明皿であろう。

42は備前焼擂鉢。口縁部の下端に粘土を継ぎ足して面を作り、そこに2条の凹線を施す。端部は斜め上方に面を作り、その下をわずかに窪ます。

43・44は丹波焼甕である。43は段状の凹線を施した肩部から両側方に拡張して、上面に凹線を施した口縁部をもつ。口縁部から外面には塗り土がかけられている。44は折り返した口縁部の内面に1条の沈線を施し、端部をやや尖らし気味に仕上げる。

45は備前焼大甕で、その口縁部は折り返して幅の広い玉縁状を呈している。

46~48は施釉陶器。46はひょうそく。糸切りの底部から「く」字に折り返した体部をもち、口縁部内に突帯を有する。突帯には芯受けの切込みが1ヶ所見られる。底部を除いて浅黄色の釉が施されている。47は比較的高い高台に丸みをもった内側する体部をもつ碗である。白褐色の軟質な胎土をもち浅黄色の釉を施す。高台置付の部分は釉をかけている。京焼系と呼ばれているものに類する。48は蓋である。上部のみに白色の釉をかけ、黒褐色の釉で界線および巴文を入れ、青色の釉で珠文を入れている。内面は露胎である。

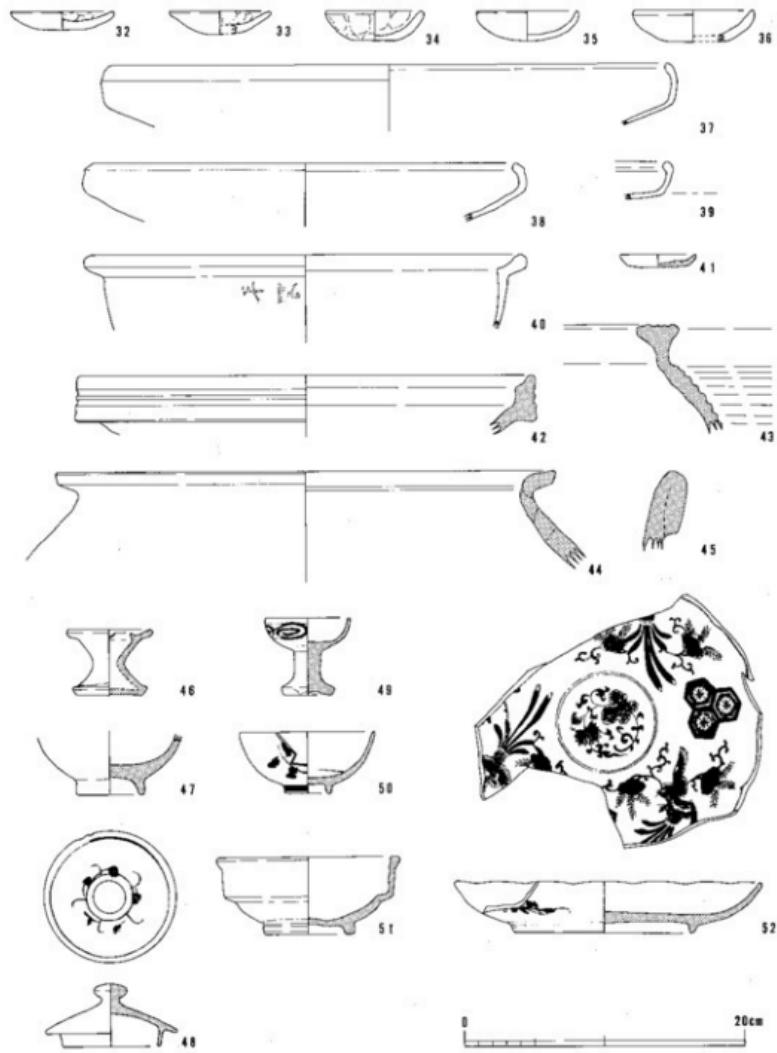
49~52は磁器である。49は染付けの仏龕碗である。底部は露胎。碗部外面に呉須によって唐草文と界線を施す。50は小ぶりの絵付けの碗である。外面には赤・青・黒色の釉で梅の木が描かれている。内面にも文様が見られる。51は小型の青磁鉢で、屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。高台部は露胎である。52は染付けの輪花大皿である。外面には界線及び唐草文、内面には中央に界線に囲まれた草花文、周囲に亀甲文と鳳凰と桐文を施す。

拡張盛土下層出土土器 (第15図 53~69)

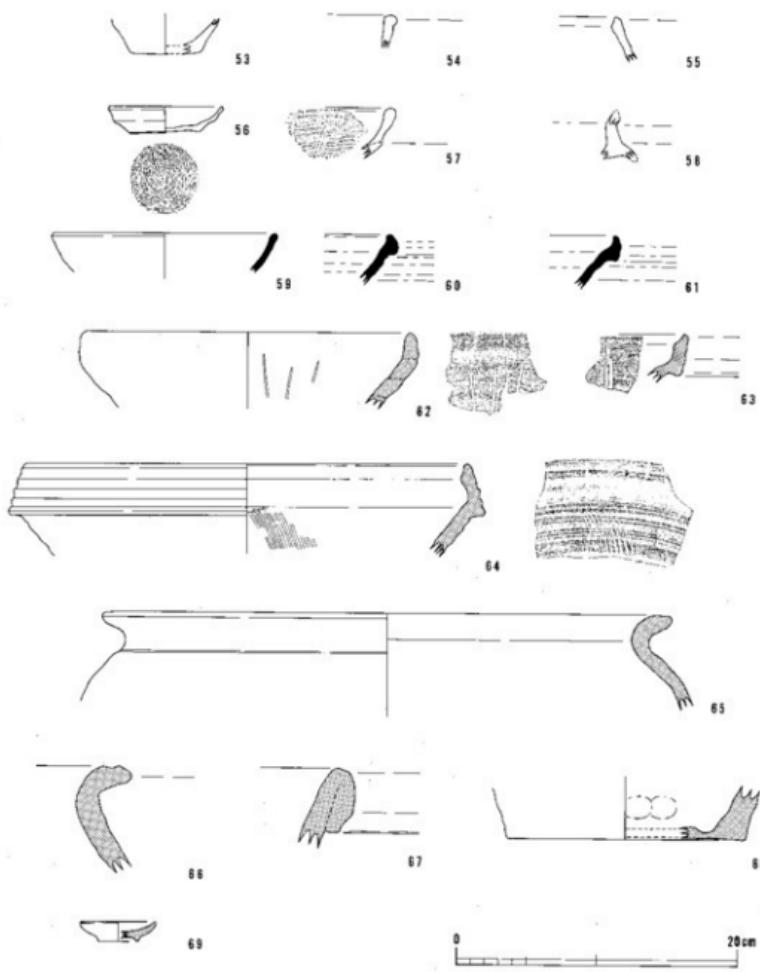
拡張盛土は堀の東側で加古川に向けて平坦面を作り出すために、人為的に運ばれた土層である。層序としては明確には分層できなかったが、石垣検出までと石垣下層とに大きく出土遺物を分けて掲載する。

53は弥生土器である。甕の底部と思われるが、磨滅が著しい。混入品であろう。

54~57は土師器である。54・55は土鍋の口縁部であり、55は外面に煤が付着している。56は糸切り底部をもつ皿で、底部から外反させて体部をつくり、屈曲してやや上方に口縁部を作り



第14図 溝出土の土器



第15図 拡張盛土下層出土の土器

出す。赤褐色を呈している。57は土師器擂鉢の口縁部で体部から段をもって上方の口縁部につながる。内面は横方向の荒い刷毛状の卸目同じ原体で縱方向に卸目を施している。

58は瓦賀の羽釜である。わずかに下垂させる鉢部に口縁部をはりつけ口縁端部を外方に屈曲させる。

59は須恵器椀、60・61は須恵器鉢である。60・61とも口縁端部を拡張し、更に上方につまみ上げて内側に凹部をもつ。東播系の捏鉢である。

62は丹波焼擂鉢である。白褐色を呈した土師器様の焼成である。粘土紐を積み上げて成形し、ナデによって仕上げている。内側して立ち上がる口縁部をもち、内面に粗い籠描きの卸目を施す。

63・64は備前焼擂鉢である。63は屈曲して立ち上がる口縁部に籠描きの卸目をもつものである。64は屈曲して立ち上がる口縁部外面に4本の凹線を施しており、籠描きの卸目をもつ。

65・66は丹波焼甕である。65は口縁部を外反させて、端部をナデによって尖らせ気味に納めている。頭部外面には1条の沈線を施している。布状のものでヨコナデして仕上げている。66は屈曲させた口縁部に更に外方に粘土を拡張して、その部分の上面に沈線を施している。

67は備前焼甕で、折り返して幅の広い玉縁状の口縁部をもつ。68は備前焼底部。

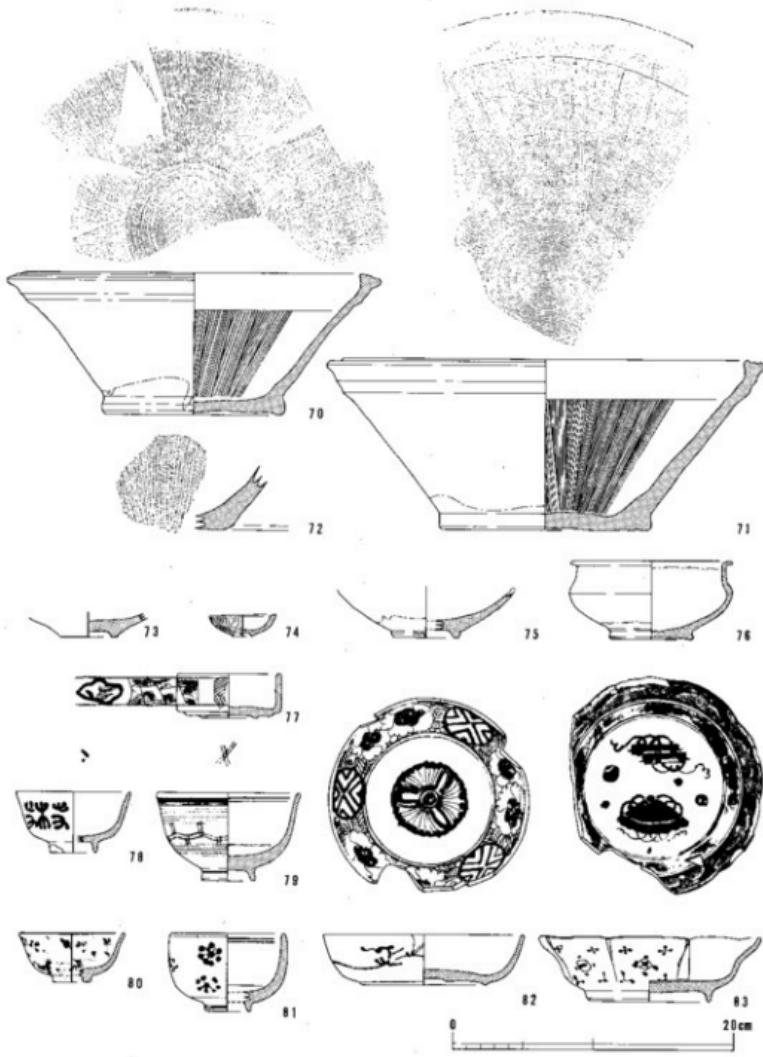
69は青磁小皿である。低い高台の置付き部には砂目当ての痕跡が残る。17世紀後半の所産であろう。

拡張盛土上層出土土器 (第16図 70~83)

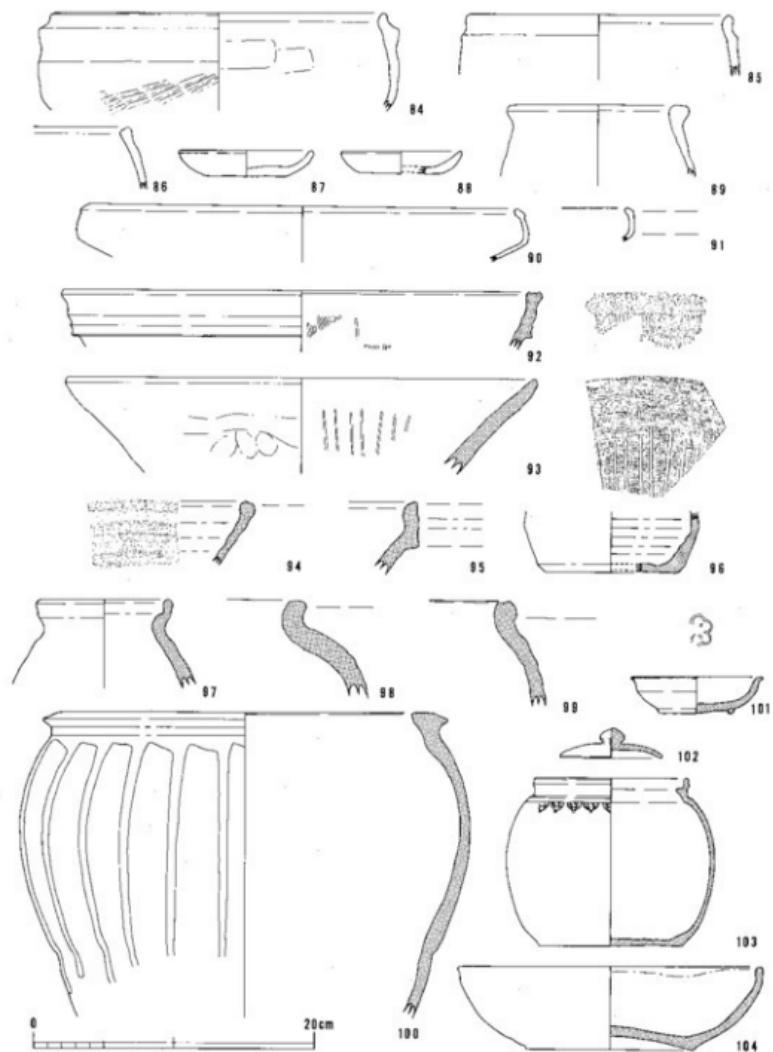
この包含層から出土した土器は、丹波焼擂鉢や肥前系の陶磁器類である。73のような17世紀前半に廻りうる見込みに胎土目痕をもつものや、74・75のように18世紀代のものも認められるが、近代の遺物も含まれていることからその時期に整地された際に埋まった遺物と捉えられる。

表土層および採集土器 (第17図 84~104)

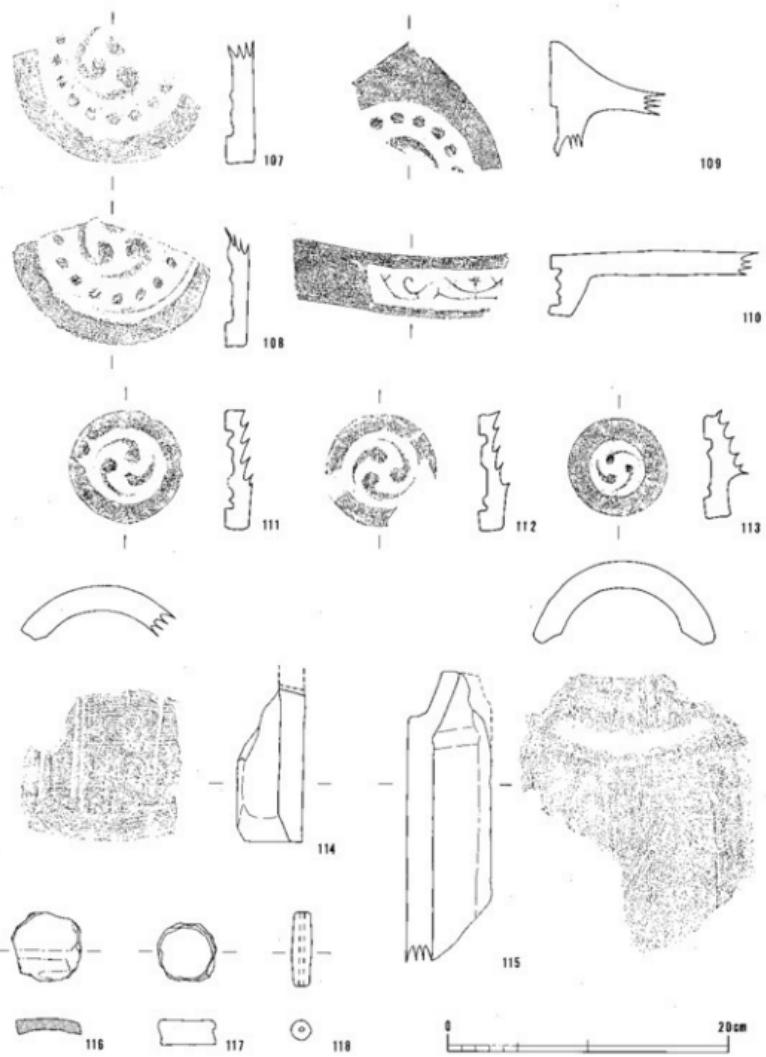
重機掘削の際に出土したものや、廃土中から採集されたものである。84~86の土師器鍋や93の籠描き卸目をもつ丹波焼擂鉢、97の丹波焼小甕、101の瀬戸美濃皿は構居に伴う時期の土器であろう。



第16図 拝張盛土上層出土の土器



第17図 表土他出土の土器



第18図 瓦・土製品

第2節 土製品（第18図 107～118）

107～115は瓦である。107～108・113～115は溝から、110～112は表土及び拡張盛土上層から出土している。107・108は軒丸瓦瓦当部で、比較的薄い作りで接合部を欠く。三巴の周りに珠文を巡らし幅の広い周縁を持つ。108には范ずれが見られる。109も同様の文様を持つが、周縁に水切り様の突出がつき、その後部に筒部様のものが取りつくため道具瓦の一部かと思われる。114は丸瓦の下端部であるが凹面の荒い布目の上にひらかなで「と四」とへら書きされている。115は白褐色を呈している。

116は近世丹波焼甕の破片を、117は瓦の破片を打ち欠いた面子である。

118は土鍤である。北堀の上層から出土している。すぐ東が加古川であるため、魚網の部品であろう。土師質に焼かれている。

第3節 石製品（第19図～第26図）

出土した石製品には、粉挽・茶磨りの両種類の石臼、台石、硯、砥石がある。石材の鑑定は実施していない。

石臼（119～129）

119～125は粉挽き臼である。119～125・127・128は南北堀の下層からの出土である。その他のものは石垣に使用されていた。完形のものは1点もなく、人為的に割られたものと考えられる。

119～122は上臼である。119は北堀南端から出土しており、全体の1/2を失っている。花崗岩か？ 直径31,0cm、高さ10,5cm、ふくみ1,4cmを測る。6分画・6溝のものと思われるが、一部3溝となっている。溝の幅は約0,6cmと大きい。使用痕が顕著に見られる。把手受けの穴が残っており、約3,0×2,5cm、深さ4,5cmを測る。上縁の高さは約2cmで、断面は丸く仕上げている。120は北堀南端出土である。全体の1/4以下しか残存しておらず上面は全て欠損している。粒子の粗い凝灰岩製か？ 復元径約28cm、高さ10,2cmと119に比べて厚みを有する。復元すると8分画・6溝のものとなる。溝の幅は0,4～0,5cmである（顕著な使用痕が見られる）。ものくばりと把手受け穴が残存している。ものくばりの穴は直径約3,6cmで、穴から約6cmの溝が続く。把手受け穴は約2,5×2,4cmの方形で深さは約3,9cmある。下面の一部に火を受けた跡が見られ、その後割られたものと思われる。121・122は上縁部分の破片である。121は花崗岩製と思われ、断面方形を呈し高さ約2,1cmの上縁部をもち、約2,3×2,5cmの方形の把手受け穴が残存している。122は南堀出土で花崗岩製と思われる。やや丸みを帯びた上縁部の破片である。形態的には119に類す

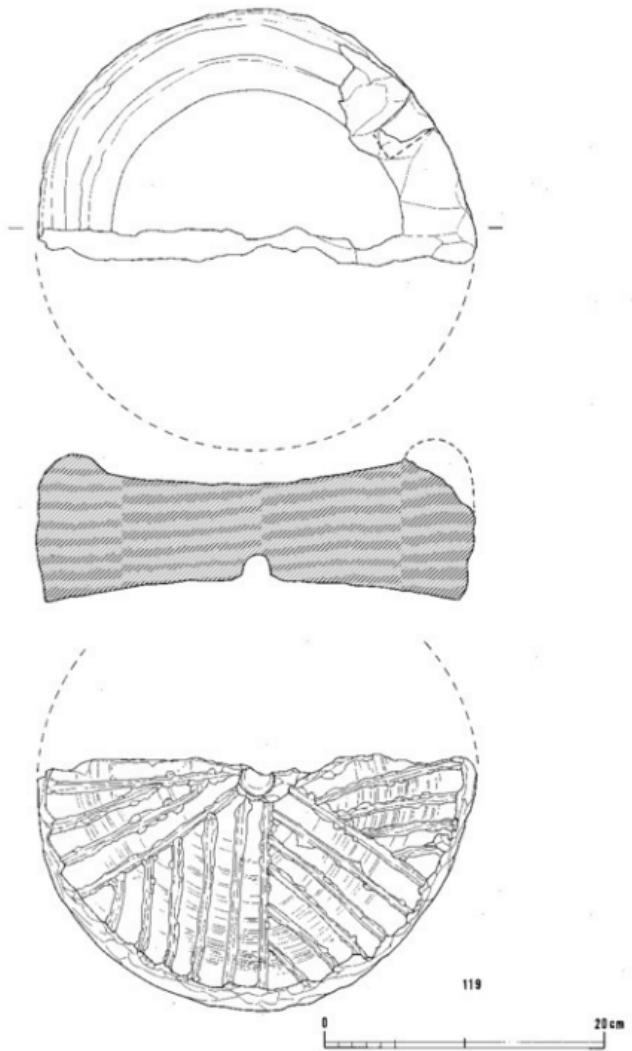
る。2片が接合できたが、その割れる以前に火を受けた痕跡が見られる。

123~125は下白である。123は北堀から出土しており、桃色を呈した粒子の粗いもので花崗岩系と思われる。破片2個が接合できたもので、全体の約3/5が残存している。直径約27.3cm、高さ約9.7cmを測る。上面の溝は3~5と不規則に配されている。溝幅は0.5~0.9cmを測る。顕著な使用痕が見られる。下面は軸受け穴のノミ痕が明瞭に残されている。下面には火を受けた痕跡が認められる。124は非常に粒子の粗いもので礫状の粒子を含んでいる。直径約26.5cm、高さ約11.1cmを測る。8分画・6溝を基本としているが、5溝の部分も見られる。顕著な使用痕が見られる。125は北堀から出土しており凝灰岩系の石材を使用しており、全体の約1/2の破片である。復元直径30.8cm、高さ11.5cmを測る。上面には溝が見られないが平滑な面を持ち、使用痕も見られる。使用に伴って擦り減ったものであろうか。下面は軸受けの穴や、面の一部にノミの痕跡が見られる。ノミの幅は約0.7cmと狭いものである。

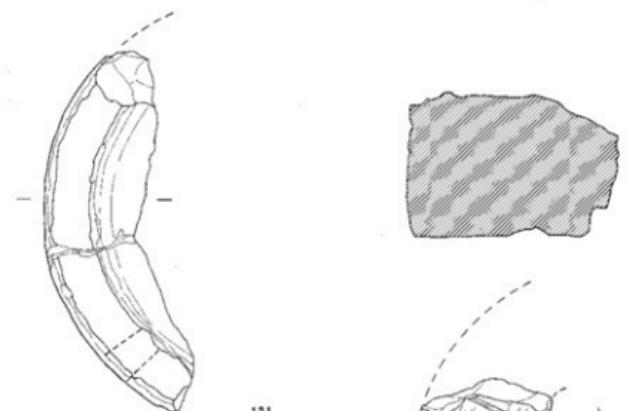
126は茶臼の上白である。B区の石垣に使用されていた。凝灰岩系であろうか。全体の1/2以下しか残存していない。復元直径20.9cm、高さ約12.6cmを測る。上面には幅約2cm、高さ約1.8cmの縁が付く。下面は線刻状の非常に細い溝が掘られているが、究めて乱雑な施し方であり、一旦磨滅した溝を再加工したものと思われる。側面のほぼ中央に把手受け穴（約2.3×1.8cm、深さ3.9cm）を有する。

127~128は茶臼の下白であり、凝灰岩質砂岩系の石材を使用している。127は南堀出土のもので全体の約1/5の破片である。受皿の周縁が欠損しているが、白面の復元径は約19cm、下部の台の復元径は31cmを測る。高さは約10.0cmで、内白部の高さ約2.9cm、台部高さ約4.5cmである。白面には細い溝が刻まれている。台部下面の中央は芯棒穴（径約1.5cm）に向けて抉られており、幅約1cmの溝状のノミ痕が顕著に残る。128は北堀出土のもので、受皿のみが残る。全体の復元径は38cmで、台部の復元径は27cmである。高さは約9.1cm、その内台部の高さは約3.2cmである。受皿の周縁は幅約1.2cmの平坦面を作っている。4つの破片が接合できたものであるが、白部は欠損しており、その部分には一部ノミで整形した痕跡が認められる破片と、平滑に磨かれ使用した痕跡かと思われる状態の破片がある。いずれにせよ再利用しようとしたものであろう。

129は石垣南端部の階段状の石組に使用されて出土した。厚さ約13cmの平滑な河原石の両側面を打ち欠いて、上面の一部に人為的な鋭い直線状の刻み目がついたものである。硬質の石材を使用しており台石として使用されたものであろうか。

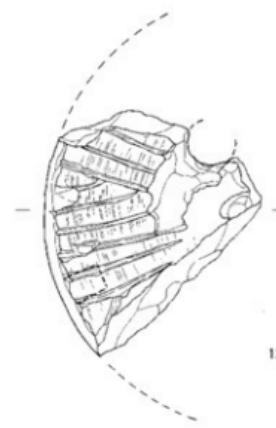


第19図 石製品(1)



121

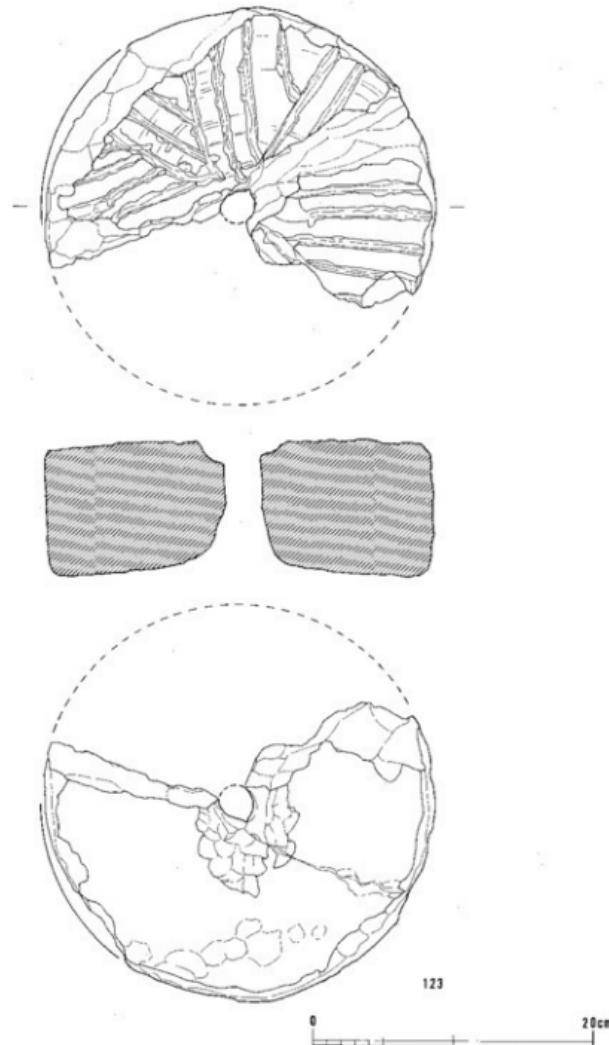
122



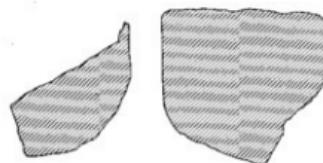
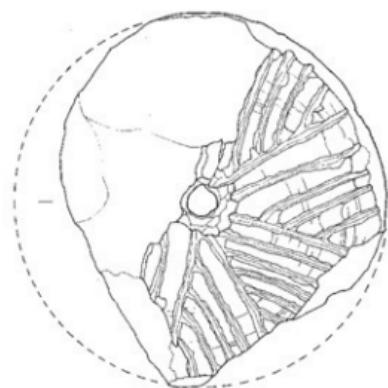
120



第20図 石製品(2)



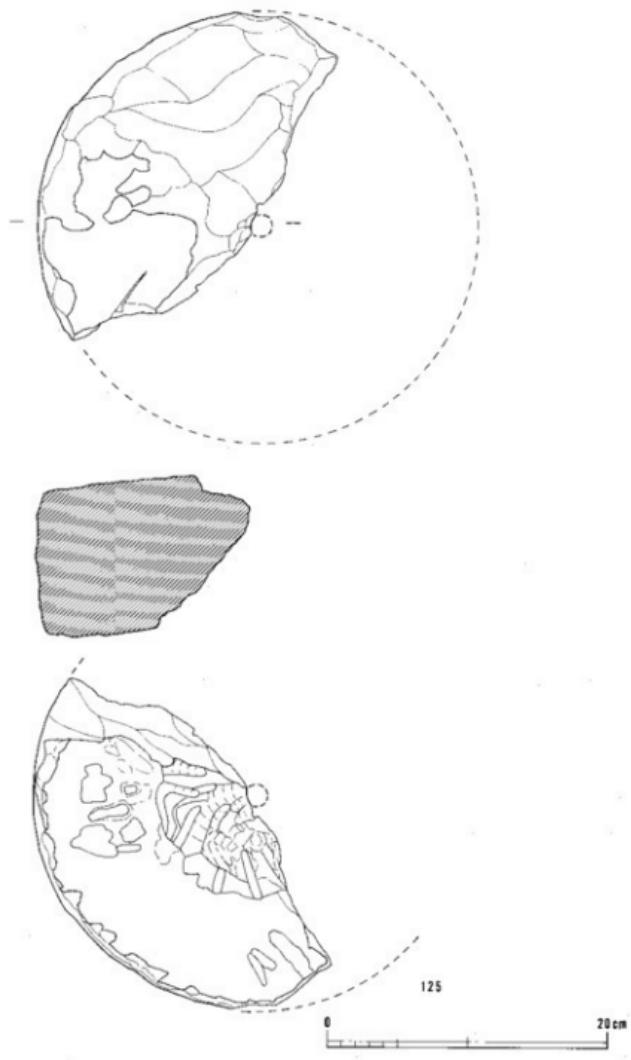
第21図 石製品(3)



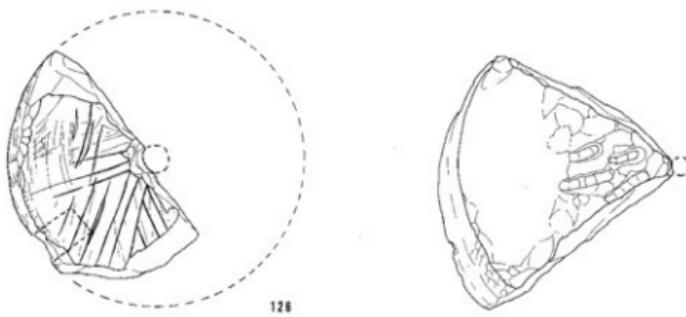
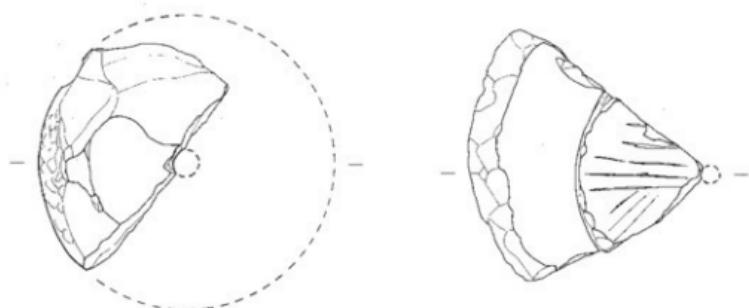
124



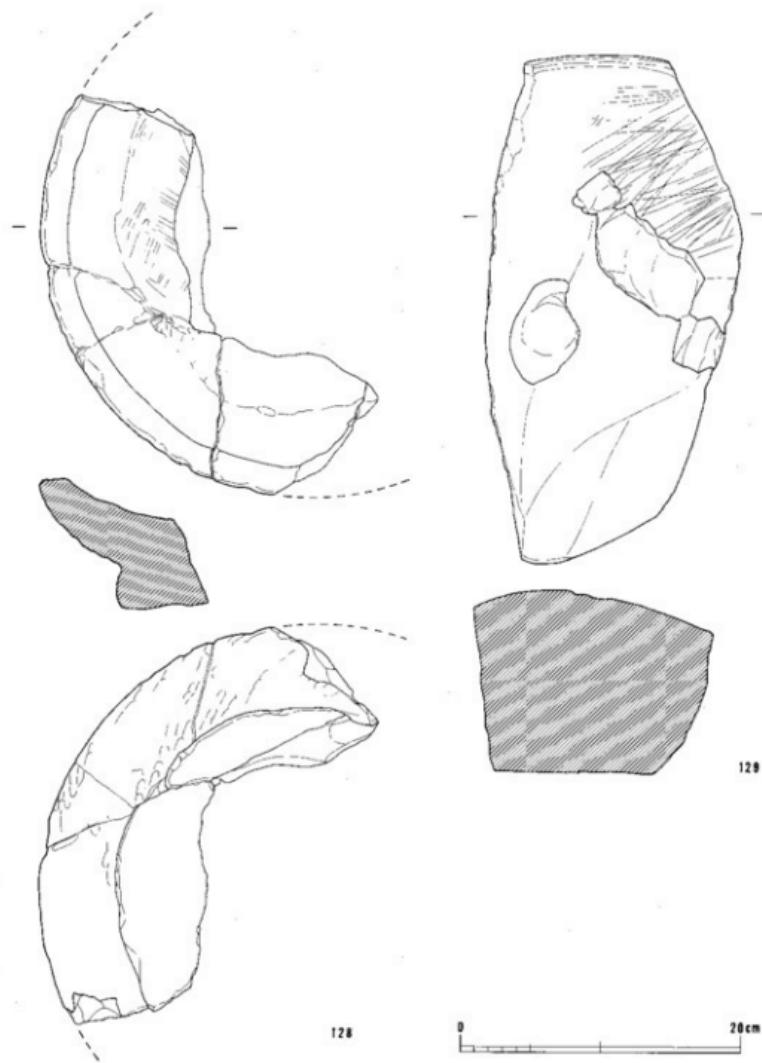
第22図 石製品(4)



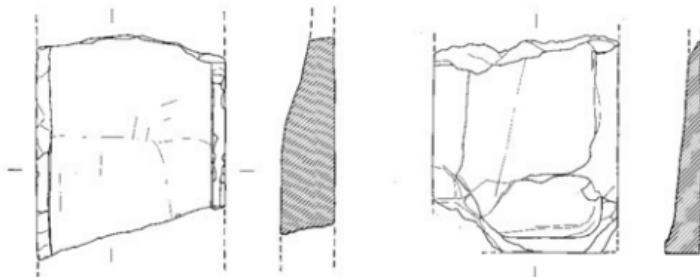
第23図 石製品(5)



第24図 石製品(6)



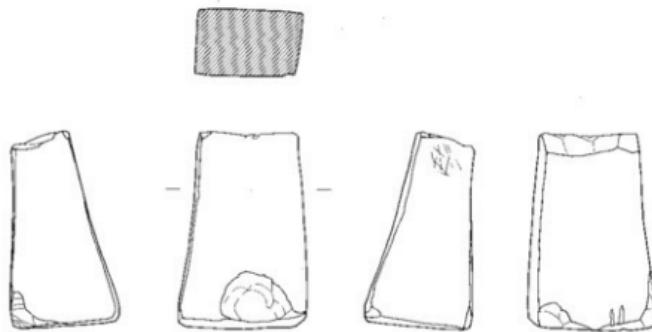
第25図 石製品(7)



131



130



132



第25図 石製品(8)

観 (第26図 130・131)

130は表土から出土した。幅約6.6cm、高さ約2.3cmを測る。淡褐色を呈した擬灰岩系の石材を使用しており、陸部から海部の部分が残存している。縁の幅は約0.4cmと狭い。ほぼ中央がわずかにへこんでおり使用の跡を示す。131は溝から出土したもので粘板岩を使用しており、剥離が著しい。幅は約6.5cmを測る。縁を作り出す際の痕跡が残っており仕上げは雑である。

砥石 (第26図 132)

132は砥石である。溝から出土している。黒雲母を含む緻密な石材を使用しており仕上砥である。一部を欠損しているが、切り離した痕跡を残す小口面を除いては全て使用しており、特に上面は大きく湾曲している。

第4節 金属製品 (第27・28図 133~159)

発掘調査で出土した金属製品には、銭・刀子・包丁・鉄・スキ先・釘などがあるが図示したもの以外にも溝や表土などの近世から近代にかけての包含層から、鉄津や珪郷製品・玩具の鉄砲・一銭銅貨が出土している。この中で構居に伴うものは、145の刀子のみである。

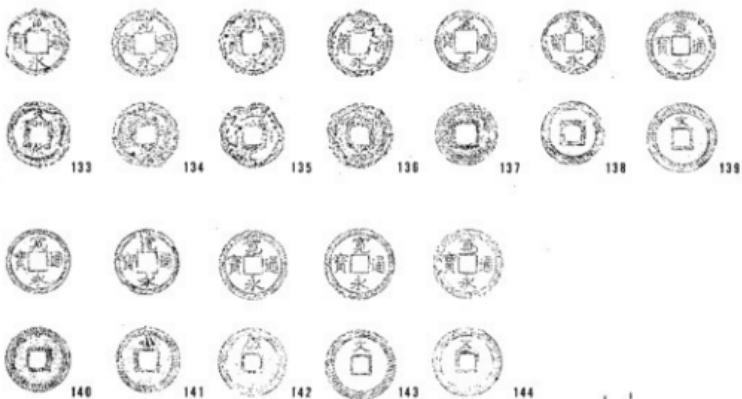
銭 (第27図 133~144)

石垣横の木の根元や溝、表土から合計43枚の銭貨が出土している。一銭銅貨1枚を除いては全て寛永通宝である。この内、石垣横の木の根元からは連なったかたちで計38枚の寛永通宝が出土した。38枚の内24枚が銅銭で18枚が鉄銭である。図示したものはその一部であるが、133~136が鉄銭で133の裏面には「文」と記している。また137~144は銅銭であるが、同様の「文」字をもつもの(139・143・144)、「小」字のもの(141)、佐渡を示す「佐」字をもつもの(142)がある。

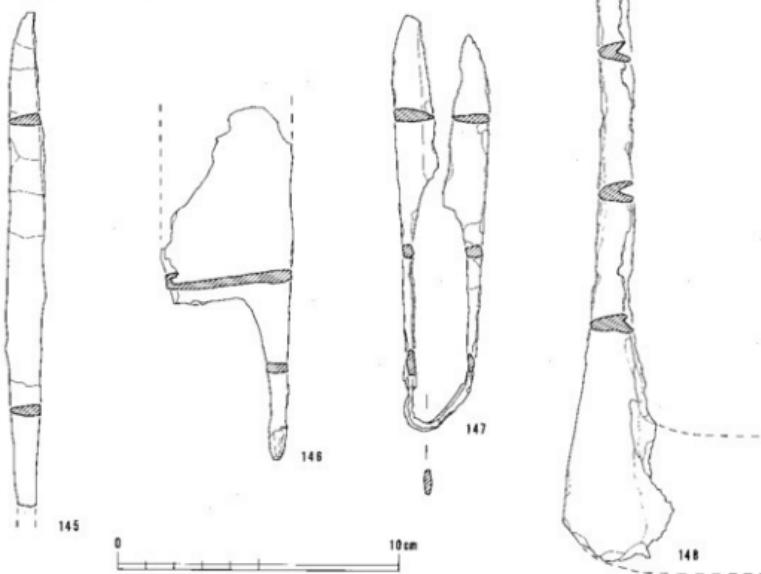
鉄製品 (第27・28図 145~159)

145は堀間の暗渠から出土した刀子である。基部を欠損しているが、現存長17.6cmで刃部長10.5cmを測る。刃部と基部の境は不明瞭であるが、背側に僅かに突出する闊をもち、刃側は僅かに幅を広げて基部へ続く。

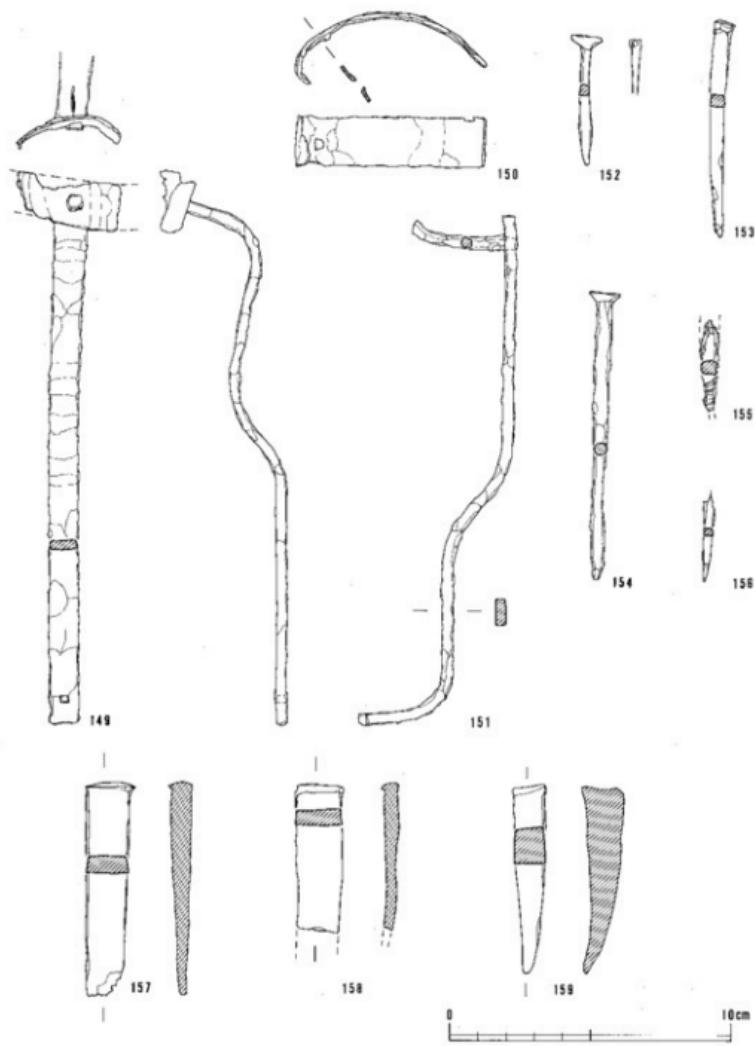
146~151は溝からの出土である。146は刃部が折れ曲がっているが、包丁の基部と思われる。147は和鉄。145はスキの一部であろう。149~151は樋を受ける金具と思われる。152~159は拡張盛土出土のもので釘・楔と思われる。



133 134 135 136 137 138 139
140 141 142 143 144



第27図 金属製品(1)



第28図 金属製品(2)

出土遺物一覧表

番号	出土地点	種別	器種	特徴	数
1	南塙下層	土師器	鉢	不明瞭な鉄、左下がり平行タタキ、口縁部・鉢上下ヨコナデ、煤付着	15
2	南塙下層	土師器	鍋	外面ナデ、内面ハケーナデ、煤付着	
3	南塙下層	土師器	鉢	外面ナデ、内面ハケーナデ、煤付着	
4	北塙下層	土師器	鉢	外面ナデ、内面ハケーナデ	
5	南塙下層	土師器	鉢	口縁部直下に段、内面に横方向の粗いハケ目	
6	北塙下層	須恵器	碗	外反する口縁部、重焼痕	
7	北塙南端下層	陶器	小甕	丹波焼、粘土紐積み上げ、肩部に「×」の手印	14
8	F区南塙下層	陶器	播鉢	丹波焼、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、赤褐色軟質、煤付着	12
9	D区南塙下層	陶器	播鉢	丹波焼、内面片口下に手印、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、赤褐色硬質	12
10	南塙南端	陶器	播鉢	丹波焼、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、青灰色硬質	13
11	塙下層	陶器	播鉢	丹波焼、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、青灰色硬質	13
12	塙下層	陶器	播鉢	丹波焼、底部、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、青灰色硬質	
13	F区南塙下層	陶器	播鉢	丹波焼、底部、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、青灰色硬質	
14	F区南塙下層	陶器	播鉢	丹波焼、底部、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、青灰色硬質	
15	北塙南端下層	陶器	播鉢	備前焼、鶴描き鉢目	13
16	北塙下層	陶器	甕	備前焼、幅の広い玉縁状口縁部、肩部に手印	12
17	北塙南端下層	磁器	瓶	青白磁底部	16
18	F区南塙上層	土師器	鍋	硬質、貼り付けの鉄、煤付着	15
19	北塙上層	土師器	鍋	硬質、貼り付けの鉄、煤付着	15
20	北塙上層	土師器	鉢	口縁部下に段	15
21	南塙上層	土師器	鉢	貼り付けの鉄、内面横方向のハケ	
22	南塙北端上層	土師器	鍋	硬質、格子タタキ、煤付着	15
23	北塙上層	土師器	鉢	左下がり平行タタキ	15
24	北塙上層	陶器	播鉢	備前焼	17
25	確認トレンチ	陶器	播鉢	丹波焼、粘土紐積み上げ、笠描き鉢目、赤褐色硬質	13
26	北塙上層	陶器	播鉢	丹波焼、笠描き鉢目、白灰色軟質	13
27	南塙上層	陶器	壺	丹波焼、底部、粘土紐積み上げ	
28	北塙上層	陶器	皿	瀬戸美濃焼	16
29	P-1	陶器	壺	備前焼、口縁部、玉縁状	
30	大壠状落込み	陶器	甕	丹波焼、自然釉、砂粒多し	
31	大壠状落込み	陶器	播鉢	丹波焼、鶴描き鉢目	17
32	溝	土師器	皿	非クロコ系、内面ユビオサエ痕明瞭	15
33	溝	土師器	皿	非クロコ系、内面ユビオサエ痕明瞭	
34	溝	土師器	皿	非クロコ系、内外面ユビオサエ痕明瞭	15
35	溝	土師器	皿	非クロコ系	
36	溝	土師器	皿	非クロコ系	
37	溝	土師器	焰烙	薄い器壁、ナデで丸く納める口縁部	15
38	溝	土師器	焰烙	薄い器壁、ナデで丸く納める口縁部	15
39	溝	土師器	焰烙	薄い器壁、ナデで丸く納める口縁部	
40	溝	瓦質土器	火鉢	陽刻型押し文字「・平一五・」	15

出土遺物一覧表

番号	出土地点	種別	器種	特徴	頁数
41	溝	陶器	皿	灯明直、柿釉、糸切り底部、煤付着	15
42	溝	陶器	擂鉢	備前焼、口縁部側面に2条の回線	17
43	溝	陶器	甕	丹波焼、肩部に凹線、口縁部は内外に拡張、口縁上部に凹線、塗り土	14
44	溝	陶器	甕	丹波焼	12
45	溝	陶器	甕	備前焼、幅の広い折り返しの玉縁状口縁部	
46	溝	陶器	甕	ひょうそく、底部糸切り、口縁内面の突唇に芯受けの抉り、浅黄色釉	17
47	溝	陶器	碗	高い高台、丸みをもった体部、白褐色胎土、浅黄色釉、疊付釉カキトリ	17
48	溝	陶器	蓋	上面のみ白色釉掛けに黒褐色文巴文、青色釉珠文、京焼系	
49	溝	磁器	仏頭瓶	梅部外面舟須	17
50	溝	磁器	碗	赤・緑・黒色釉で柿の木文、内面にも文様	17
51	溝	陶器	鉢	灰釉、鉄鉢を飛ばす、京焼系、19C後半	
52	溝	磁器	輪花皿	外面唐草文・界線、内面見込み草花文、周囲亀甲文・鳳凰文・桐文	18
53	拡張盛土下層	弥生土器	甕	底部、磨滅著しい	
54	拡張盛土下層	土師器	鍋		
55	拡張盛土下層	土師器	鍋	外面煤付着	
56	拡張盛土下層	土師器	皿	糸切り、外半して稜をもって口縁部に続く	15
57	拡張盛土下層	土師器	擂鉢	口縁部下に段、外面ナデ、内面縱横の卸目	15
58	拡張盛土下層	瓦質土器	羽釜	外反して作り出した脚の上に口縁部をつける	15
59	拡張盛土下層	須恵器	椀	重焼痕跡	
60	拡張盛土下層	須恵器	鉢	拡張して上方につまみ上げる口縁部、東播系	13
61	拡張盛土下層	須恵器	鉢	拡張して上方につまみ上げる口縁部、東播系	13
62	拡張盛土下層	陶器	擂鉢	丹波焼、粘土積み上げ成形、内窓した口縁部、白褐色軟質	13
63	拡張盛土下層	陶器	擂鉢	備前焼、緻密な胎土、擂引き卸目	
64	拡張盛土下層	陶器	擂鉢	備前焼、しつとりした胎土、擂引き卸目	
65	拡張盛土下層	甕	甕	丹波焼、外反した口縁部、頸部外面に1条の沈線	12
66	拡張盛土下層	甕	甕	丹波焼、外反した口縁部上面に1条の沈線	12
67	拡張盛土下層	陶器	甕	備前焼、折り返して幅の広い玉縁状口縁部	12
68	拡張盛土下層	陶器	底部	備前焼底部、内面ユビナデ	
69	拡張盛土下層	磁器	皿	青磁、高台裏砂付着、17C後半	
70	拡張盛土上層	陶器	擂鉢	丹波焼、低い高台、内外に拡張した口縁部、擂引き卸目、黒褐色釉	17
71	拡張盛土上層	陶器	擂鉢	丹波焼、低い高台、内外に拡張した口縁部、擂引き卸目、黒褐色釉	
72	拡張盛土上層	陶器	擂鉢	丹波焼、擂引き卸目、自然釉	17
73	拡張盛土上層	陶器	椀	淡黄色釉、内面胎土目痕3ヶ所、17C前半	16
74	拡張盛土上層	磁器	紅皿	白磁、型作り外面放射文、底部露胎、18C	16
75	拡張盛土上層	陶器	皿	底部露胎、内面見込み釉カキトリ、肥前波佐見地方、18C	16
76	拡張盛土上層	磁器	香炉	口縁部から外面底部上までコバルトブルー釉、底部外面に3ヶ所つまみ	
77	拡張盛土上層	磁器	重ね鉢	底部釉カキトリ、典須・赤・青・褐色で絵付け	
78	拡張盛土上層	磁器	碗	外面典須珠文繋ぎ	16
79	拡張盛土上層	磁器	碗	内面典須界線、外面界線・幾何学文	17
80	拡張盛土上層	磁器	椀	内外面典須草花文	16

出土遺物一覧表

番号	出土地点	種別	器種	特徴	因版
81	拡張盛土上層	磁器	碗	外面具須珠文繋ぎ	16
82	拡張盛土上層	磁器	皿	蛇の目釉カキトリ、外唐草文、内花文、界線	18
83	拡張盛土上層	磁器	輪花皿	八花輪花、外珠文繋ぎ、内見込み巻物・傘文、周囲雄文	18
84	B区表土	土師器	鍋	退化した鉢の上下ヨコナデ、左下がり平行タタキ、煤付着	15
85	確認トレンチ	土師器	鍋	口縁部下に段	15
86	表土	土師器	鍋	左下がり平行タタキ、内面板状工具ナデ、煤付着	
87	東サブトレ	土師器	皿	非ロクロ系	
88	表土	土師器	皿	非ロクロ系	
89	表土	土師器	蓋	火消し壺	15
90	E区表土	土師器	焙烙	薄い器壁、ナデで丸く納める口縁部	15
91	表土	土師器	焙烙	薄い器壁、ナデで丸く納める口縁部	
92	C区拡張盛土	陶器	擂鉢	丹波焼、櫛掻き鉢目	17
93	F区表土	陶器	擂鉢	丹波焼、片口、ユビオサエ、外反する口縁部、籠掻き鉢目、赤褐色硬質	13
94	F区表土	陶器	擂鉢	丹波焼、櫛掻き鉢目、自然釉、17C	17
95	表土	陶器	擂鉢	備前焼	
96	表土	陶器	壺底部	丹波焼	14
97	廐土	陶器	小甕	丹波焼	14
98	表土	陶器	甕	丹波焼、厚い体部	14
99	表土	陶器	甕	丹波焼、玉縁状口縁部	14
100	F区表土	陶器	甕	丹波焼	
101	E区拡張盛土	陶器	皿	瀬戸美濃焼、内面印花文、16C	16
102	表土	陶器	蓋	常滑系、朱泥、近代	
103	H区表土	陶器	小壺	常滑系、朱泥、口縁部内面に蓋受け、肩部にスタンプ文、近代	
104	E区拡張盛土	陶器	鉢	外面露胎、底部砂付着、内面白褐色釉	
105	拡張盛土	陶器	片口鉢	写真のみ、内面及び片口部白褐色釉、外面露胎	17
106	拡張盛土上層	磁器	皿	写真のみ、内面矢車文	18
107	D区溝	瓦	軒丸瓦	いぶし瓦、巴文	18
108	F区溝	瓦	軒丸瓦	いぶし瓦、巴文	18
109	E区溝	瓦	道具瓦	いぶし瓦、巴文	18
110	拡張盛土上層	瓦	軒平瓦	いぶし瓦、唐草文	18
111	確認調査	瓦	軒平瓦	いぶし瓦、巴文	18
112	拡張盛土上層	瓦	軒平瓦	いぶし瓦、巴文	18
113	F区溝	瓦	軒平瓦	いぶし瓦、巴文	18
114	F区溝	瓦	丸瓦	いぶし瓦、内面に「と四」の籠掻き	18
115	F区溝	瓦	丸瓦	内面粗い布目	
116	拡張盛土上層	土製品	面子	丹波焼裏片を打ち欠く	22
117	拡張盛土上層	土製品	面子	いぶし瓦を打ち欠く	22
118	北堀上層	土師質	土鍾		22
119	北堀南端下層	石製品	石臼	粉挽き上白、花崗岩？	19
120	北堀南端下層	石製品	石臼	粉挽き上白、凝灰岩？	19

出土遺物一覧表

番号	出土地点	種別	器種	特徴	図版
121	塚下層	石製品	石臼	粉挽き上臼、花崗岩?	19
122	南堀下層	石製品	石臼	粉挽き上臼、花崗岩?	
123	北堀下層	石製品	石臼	粉挽き下臼、花崗岩?	20
124	塚下層	石製品	石臼	粉挽き下臼、礫岩?	20
125	北堀下層	石製品	石臼	粉挽き下臼、凝灰岩?	20
126	B区石垣	石製品	石臼	茶臼上臼、凝灰岩?	21
127	南堀下層	石製品	石臼	茶臼下臼、凝灰岩質砂岩?	21
128	北堀下層	石製品	石臼	茶臼下臼受皿部、白鄭欠損、再利用痕跡あり、凝灰岩質砂岩?	21
129	石垣階段状	石製品	台石	河原石の一部に鋭い刻み目あり	21
130	表採	石製品	硯	凝灰岩?、両端欠損、使用痕あり	22
131	溝	石製品	硯	粘板岩製、剥離著しい	22
132	F区溝	石製品	砥石	黒雲母含む緻密な石材、4面使用、木口は切りっぱなし	22
133	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭、裏面「文」字	22
134	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、鐵錢	22
135	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、鐵錢	22
136	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、鐵錢	22
137	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭	22
138	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭	22
139	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭、裏面「文」字	22
140	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭	22
141	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭、裏面「小」字	22
142	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭、裏面「佐」字	22
143	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭、裏面「文」字	22
144	石垣横	金属製品	銭	寛永通宝、銅銭、裏面「文」字	22
145	塙堀	金属製品	刀子		23
146	溝	金属製品	包丁		23
147	溝	金属製品	和鉄		23
148	溝・表土	金属製品	スギ先		23
149	溝	金属製品	金具		23
150	溝	金属製品	金具		23
151	溝	金属製品	金具		23
152	拵張盛土	金属製品	釘	釘	23
153	拵張盛土	金属製品	釘	角釘	23
154	拵張盛土	金属製品	釘	丸釘	23
155	拵張盛土	金属製品	釘		23
156	拵張盛土	金属製品	釘	角釘	23
157	拵張盛土上層	金属製品	楔		23
158	拵張盛土	金属製品	楔		23
159	確認調査2層	金属製品	楔		23

第5章 科学探査

(1) 野村構居跡の科学探査 一堀跡の電気探査一

今回の発掘調査によって、野村構居跡の東部には北から南に延びる堀と、南西から北に延びる2本の堀を検出したので、本遺跡は周囲を堀で防御する構造ではないかと想定した。しかし、発掘調査を実施した箇所はその推定構居跡の東側のごく一部であり、また他は民有地であるため、さらには事業の性格から、全城を発掘調査することが不可能であった。そこで、発掘をせずに以上の想定を確認する目的で、関係者の了解のもとに電気探査を実施することとした。

一般的には堀や溝は、その周囲の土壤から較べると、中に埋まっている土は粒子の細かいものからなり、掘削をして凹地となっているので、その箇所は水分を集め易いと考えられる。探査によって、周囲より水分が多い箇所の広がりを検出すれば、堀や溝を想定することができる。

電気探査は地中に電気を流し、土層の電気抵抗を測定し、その変化すなわち電気抵抗の高低によって地質・土壤の違いを判断する。水分の多い箇所は電気が流れ易く、したがって電気抵抗が低い。そして、地山や岩石を含む土層では流れ難い。今回、探査の対象とするのは、堀跡であり、電気抵抗の低い箇所の広がりが認められれば、堀と推定できると考えたのである。

今回の探査では、4本の電極を使用し、その内の2本に電流(Current=C)を流し、他の2本で電位(Potential=P)を測定する方法をとった。電流と電位の各1本(C1, P1)を半無限大の違い位置に固定し、残り2本(C2, P2)で探査区内を移動し、測点毎に電位を測る2極法である。測定位置は移動電極の中間位置で、深度は電極間の距離にはば等しいと考えられている。発掘調査によって、検出された堀は上幅が約4m、深さ約0.8~1.5mほどであるので、他の部分でも同様な状況で周囲を巡っていると想定し、移動電極間を1、2、3mの3種の測定間隔とし、電極の移動間隔を1mピッチとした。

本報告ではその内、電極間1mのものを報告する。探査結果は比抵抗分布図として整理し、その結果は等比抵抗線で表示した。図はそれぞれの測定範囲内での抵抗値の変化である。抵抗値の高い箇所は実線を用い、低い部分は破線を使用した。各測定図の周囲の外郭の一目盛りは1m、抵抗値の単位はohm·mである。なお、測定に使用した装置はイギリスGeoscan社製のRM4 Resistance Meterである。



第29図 電気探査範囲図

(2) 探査の結果

野村構居の主郭部と考えられる所には、現在、上原神社がある。神社境内は周囲より約1m程高く、北は民家、南と西は水田である。発掘調査で検出した南堀は神社の南や西を巡り、北東で東へ折れて北堀へと続くと想定し、3ヶ所の測定区を設定した。東から順にA区、B区、C区とする。

〔A測定区〕 神社の南、畠に設けた測定区で、東西16m、南北5mである。北側中央、東から9m付近を中心に円弧状に抵抗の高い等比抵抗線の密な広がりが認められ、それは中央で約3m南を先端とし、両側に5mほど広がっている。その外（南東と南西部）は抵抗が低く、かつ等比抵抗線の粗な状況が表現されている。抵抗の高い箇所は、神社参道の真南である。地山（抵抗の高い土質）が幅約10m、幅約2～3m程突出している可能性が考えられ、その東と西が堀と想定することができる。

〔B測定区〕 神社の西側の水田に設けた測定区で、東西17m、南北10m、さらに東から8mで、東西4m、南北9mの追加区を延ばしている。測定区の東側は、神社境内地の土盛石垣（高さ約1m）に接している。今回対象とした水田は、探査時は非常に水分が多く、歩行困難な状況であった。

比抵抗分布図では中央付近は抵抗の高い数値が広がっている。しかし、等比抵抗線は比較的粗く、ほぼ均質な土層状況と考えられる。測定区の東から約1～4mにかけては急激に抵抗値の低い箇所があり、また等比抵抗線も密になる。3m付近が一番低くなっている。測定区東端はやや抵抗値が上がりぎみである。このことから、幅約3～4m、堀底が測定区東から約2～3mに位置する南北の堀を想定できる。さらに堀の両斜面は急に下がる模様である。

探査作業において電極棒は東側では刺し易く、中央から西では耕土下は硬い土となり、突き刺し難い状況であったが、これは上の想定を裏付けるものであろう。

〔C測定区〕 南北の道路を挟んでB測定区の西側にある。東西22m、南北19mの広さで、北と西は民家である。測定区の東三分の二は低い抵抗値を示し、西側は高い状況である。東から6～7m付近が一番低く、両側へ緩く上がっていく。B測定区で認められた堀の状況とは異なり、幅が広く、傾斜の緩い凹地が南北に連なっている状況が想定される。

(3) 小結

上原神社の北側は民家が建ち、探査はできなかった。また、それぞれ想定した堀跡の全体像をとらえるまでにはいたっていない。さらに、発掘等の確認も行っていないので、早急に堀と断定することはできない。しかし、あえて探査結果と発掘調査成果を踏まえて推定すると、以下のことが考えられる。

野村構居の主郭部は現上原神社境内地で、今回発掘調査を実施した箇所はその東端部である。主郭を巡る堀は上幅約3m程度で、深さは1~1.5m程であろう。南側の堀の中央部に入口状の突出部を付けている可能性がある。西側は南側の堀と同様の幅で南北に伸び、さらにその西に幅の広い低湿地を控えている。現在、南北方向に存在する道路は西側の堀とその低湿地の間に付けられた模様で、もしかするとそこには築地や道路などが存在したのかもしれない。北は発掘調査も探査も実施していないので、状況は不明であるが、発掘調査地内の北堀が、その東延長に取りつくものと想定される。

主郭部は東西・南北とも約60m程度あり、四辺を堀で囲んだ構えと復元できる。

第6章 まとめ

構居について

西脇市に所在する「野村構居跡」の今回の発掘調査では、城郭推定範囲の東端を部分的に調査したに過ぎない。しかしながら、発掘調査・科学的探査・出土遺物の整理を通して「野村構居跡」を解明する幾つかの資料を提供することができた。ここに現時点での推察を加えて、今後の展望としたい。

今回の調査で検出できた遺構の中で、出土遺物から城郭に伴う確実なものは南北の堀とその関連の遺構しか抽出できない⁽¹⁾。南北の堀の内、南堀は幅約4.5m、深さ約1mを測る。また、北堀は幅約4.5m、深さ約1.5mを測り、堀底の東側に一段のステップを設けるものである⁽²⁾。この両堀の埋土上層には地山と同質の黄褐色極細砂のブロックが多量に含まれていた。南北の堀の間には幅約1mの土橋状の入口があり、砂礫混じりの土で固めている。その中央には幅約28cm、深さ約35cmの小溝が切られており、おそらく暗渠を成していたものと思われる。南北二つの堀はこの土橋の部分で約4m食い違っており、未発達な食い違いの虎口として捉えることもできる。この入口の外側には土坑が掘られている。また内側の南堀北端の段上には石組が見られる。これらは入口に伴う門等の構造物があったことを示唆している。

この様な規模の堀をもつ城郭の例は多々あるが、ほとんどが土塁を伴っている。防衛の機能としての堀ならば、内側に土塁をもたねば容易に進入を許すことになろう。堀の埋土上層は黄褐色極細砂のブロックが多く見られ、人為的に埋められたものである。しかも地山に類するブロックであることは、堀を掘削した土を盛り上げた土塁を再度埋め戻したと考えることができよう。更に北堀の内側、調査区の西端で検出した石列は一段据り塗めた下に1~3段積み上げており、東側の面は不揃いである。これを土塁内側の基底石として捉えたい。

科学的探査の結果では、ほぼ方形を呈する主郭部の南側と西側で堀の存在を示しており、特に西側は堀の外にも築地か道路、さらには低湿地状の落ち込みが想定され、多重の防御施設の存在を暗示している。また、主郭部の南側中央部にも入口が設けられている可能性を示している。

以上をまとめれば、この城郭の主郭部の守りは、東側は加古川とその河川崖があり、さらにその内側に堀と土塁をもつ。この堀は50m四方の規模をもつ主郭部の全周を廻り、東側と南側に入口をもつものと推定できる⁽³⁾。

遺物について

堀下層から出土した遺物などの構居に伴うと思われる遺物は少なく、特に皿類や椀類は土師器・陶磁器共ほとんど出土していない。その反面、擂鉢・石臼の出土比率が高い。すべて破片での出土で、特に石臼は火を受けた後で割られている。意図的な破棄の可能性が高い。

野村構居から出土した丹波焼擂鉢は、粘土紐を積み上げた紐作りで成形され、ナデによって調整されており、成形の際のユビオサエを明瞭に残すものは93のみである。焼成は、26・62のように白色の土師器に近い軟質のもの、8のように赤褐色の軟質のものと、10~14・93のように赤褐色の硬質のもの、9・25のように灰色の須恵器に近い硬質のものに分けられる。前者は内彎して端部を丸く納める口縁部をもち、稲荷山窯のものと似た古い様相を示す。後者は直線的かやや外反して端部を三角形につまみ上げる口縁部をもつ。全て籠描き一本引の卸目を持つもので、櫛描きのものは18世紀以降のものを除いてはない。

籠描き一本引の卸目をもつ丹波焼擂鉢は、15世紀後半から17世紀中頃の時期に見られ、また櫛描きのものは16世紀末の出現とされる⁽⁴⁾⁽⁵⁾。播磨や丹有に所在する発掘調査された城郭跡の中で、野村構居と同じように、籠描きの卸目を持つ丹波焼擂鉢のみで櫛描きのものを出土しない遺跡には、中尾城・釜屋城・河津館・御着城などがあるが、すべて16世紀後半までの城郭である。また、櫛描きの卸目をもつものも同時に出土する遺跡は姫路城・大阪城などの織豊政権下で改築された城郭である。このことから、籠描きの卸目を持つ丹波焼擂鉢のみを出土する城郭は、織豊政権によって全国統一がなされる過程で姿を消したもので、1580年頃までのものと考えることができよう。

野村構居堀下層出土のものは、16世紀前半に破却されたとされる中尾城のものと比較すると、ユビオサエの痕跡がナデによって消されていることなどから後出のものと思われる。

以上のことから、野村構居は周囲に堀と土塁を巡らせた50m四方の方形の主郭部をもち、16世紀の後半にはその機能を終えていたものと思われる⁽⁶⁾。そして17世紀の後半から18世紀にかけて、堀を埋め、土を盛り出して石垣を築き、整地を行って、近代に至るまでおそらく加古川の水運に関連した施設があったものと思われる。

註

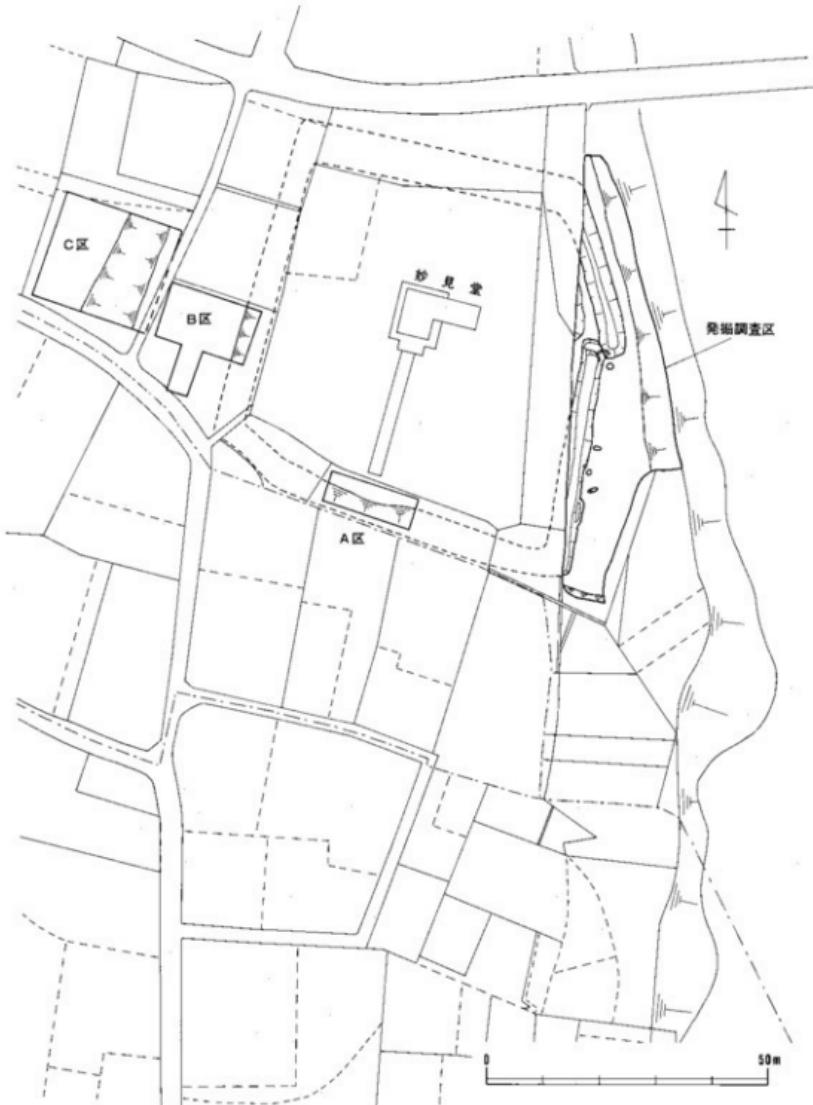
- (1) 大堀状の落ち込みや石垣は、確認調査時や発掘調査の当初では城郭に伴う遺構と考えていた。中型の堀の外側に土塁を築き、更に大型の堀をもつ例には、加茂の構居と推定される姫路市の加茂遺跡などがあり、野村構居でも大堀状の落ち込みを大型の堀に、石垣を土塁の基底を固めるものとして捉えていた。しかしながら、大堀状の落ち込みは最深部まで調査し得なかったものの、近世から近代にかけての遺物が出土したこと。科学的探査の結果、この様な深くて大きな落ち込みは主郭部前面までは延びていないこと。また、石垣も斜面の中途

に作り、石垣の上下層とも締まりのない土層であったこと。石垣に接した松の木の根本から寛永通宝が出土したこと。石垣下層から17世紀以降の土器が出土したこと。以上の理由から大堀状の落ち込みや石垣は城郭に伴う造構ではないとした。

- (2) この堀底に付けられたステップは河津館跡などでも見られるものであるが、地山下層の礫層上面で止まっていることから、底浚えをした際に付けられたものかも知れない。
- (3) さらに調査地点の南側約150mには東西に走る段丘崖が見られ、南東隅には現在、祠が祀ってある。ここまでを域として築郭の構造をなすものとした考え方もある。
- (4) 土師器棺鉢（5・57）も、16世紀後半までの釜屋城跡や英賀城跡、平成3年度に兵庫県教育委員会が発掘調査した小田城跡から出土している。
- (5) 17世紀には西脇市内でも鹿野窯跡で磁鉢を焼成しているが、梅描きの郊目をもつ。（「播磨・綠風古窯址」西脇市教育委員会 昭和58年度）
- (6) 主郭部妙見堂裏に建つ近世の供養塔には、「有田修理大夫重則」と「上原左京大夫兼親」の名が見られる。前者は中町段ノ城や八千代町野間城の有(在)田氏と関係が深いものと思われるが、ともに16世紀後半(永禄～天正年間)に東条別所氏に敗れている。また後者は野村石上神社の天文11年銘(1542)棟札にその名前が見られる。

参考文献

- 「河津館跡」近畿自動車路舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書(VI) 兵庫県文化財調査報告書第43冊 昭和61年度 兵庫県教育委員会
- 「加茂跡」-小寺・太ノ前地区- 姫路市文化財調査報告V 昭和49年度 姫路市文化財保護協会
- 「釜屋城跡の調査」北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II 兵庫県文化財調査報告書第16冊 昭和57年度 兵庫県教育委員会
- 「中尾城跡」近畿自動車路舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XI) 兵庫県文化財調査報告書第67冊 昭和63年度 兵庫県教育委員会
- 「兵庫県の中世城館・莊園遺跡」兵庫県教育委員会 昭和56年度



第30図 野村構居主郭部全体図

図 版

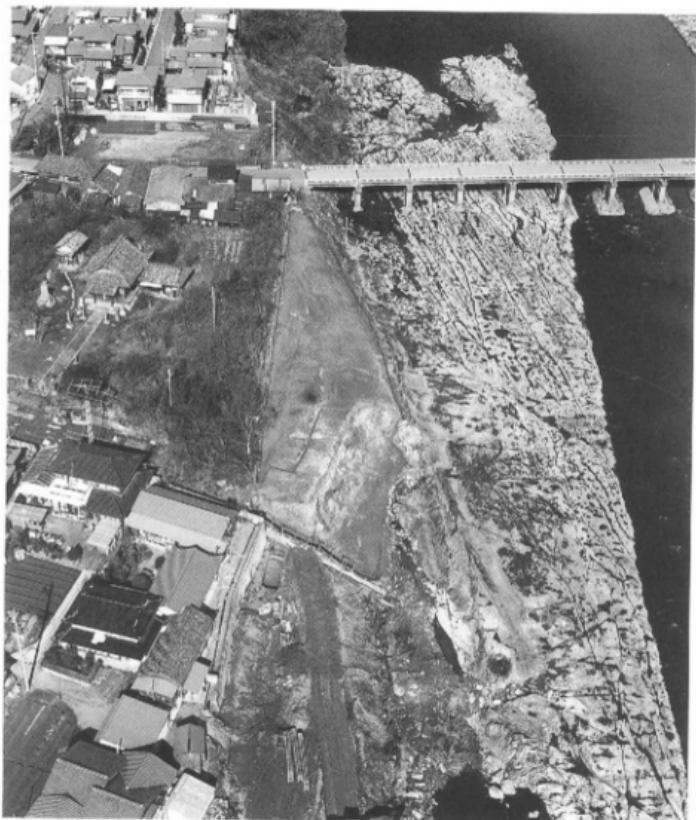




野村構居全景(南から)



野村構居全景(東から)



調査地全景(南から)



加古川対岸からの遠景



調査地全景(東から)



野村の滝と調査地



調査区南端大堀状落ち込み



寛永通宝出土状況



溝断面



石垣



階段状の石組



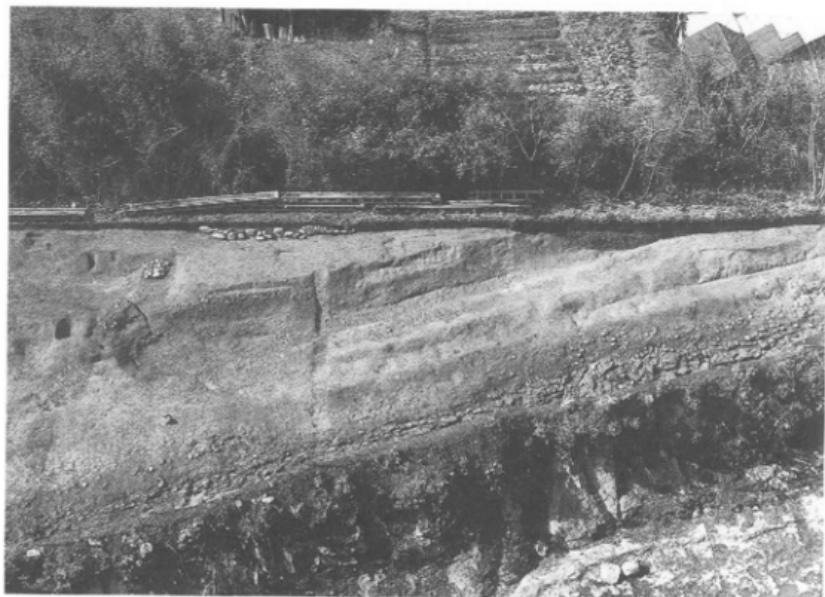
堤全景



北堤断面 (上)B・C間 (下)C・D間



南堤断面 (上)E・F間 (下)F・G間



北堀全景



北堀(北から)



南北の堀と入口周辺



(上)石組、(下)石列



(上)堀間の暗渠、(下)柱穴



主郭部(南西から)



主郭部に建つ妙見堂



神社裏の供養塔



上原氏・有田氏供養塔



主郭部南の堀推定地(西から)



主郭部南の堀推定地(東から)



主郭部西の堀推定地(南から)



船着場



南西段丘端の祠



南東段丘端の祠



主郭部南西の祠



主郭部北東の祠



電気探査



電気探査

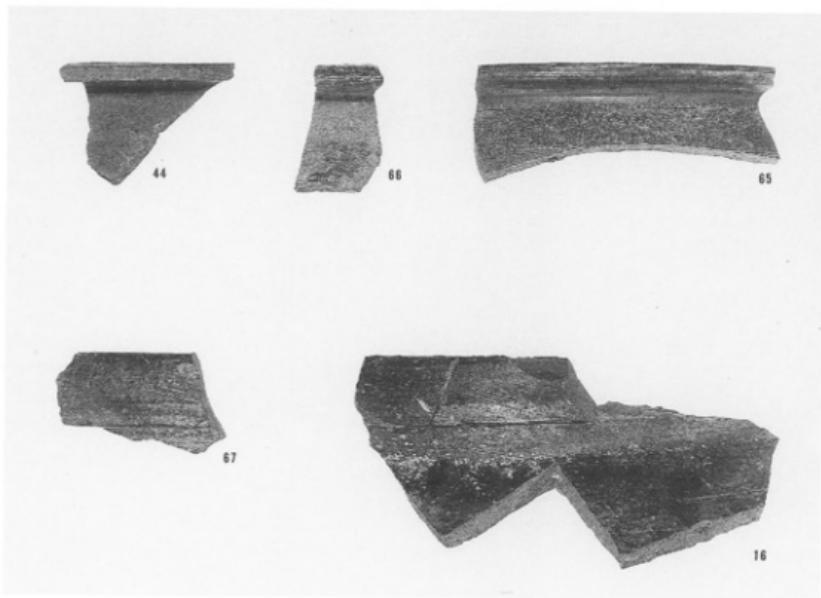
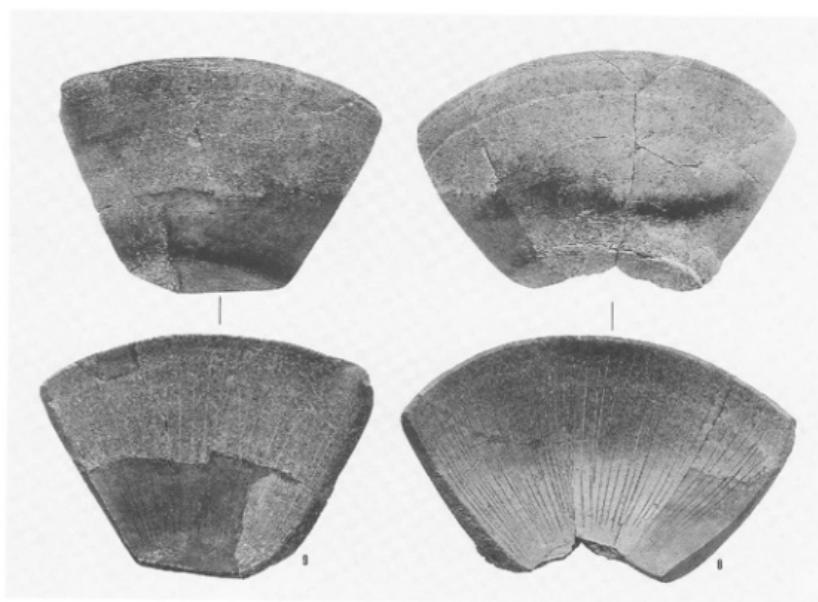


測量

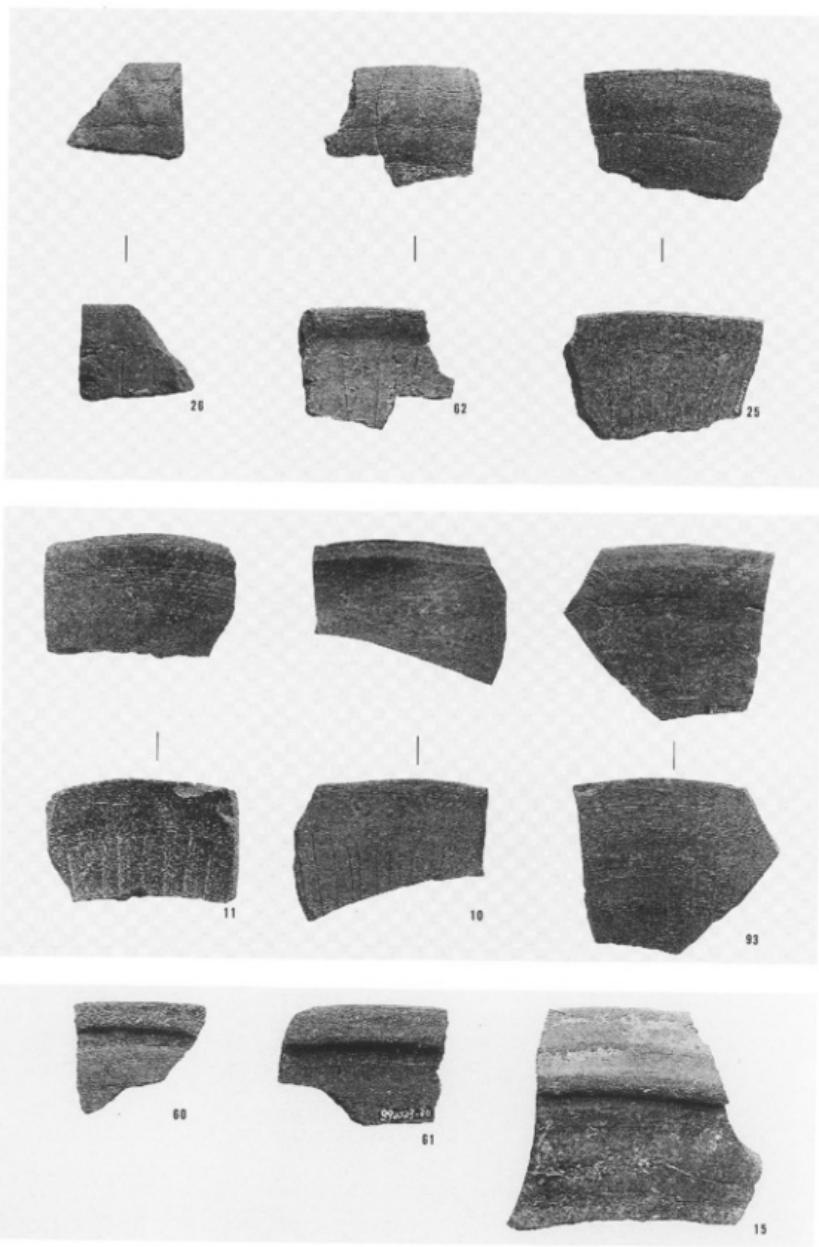


北堀断面土層転写

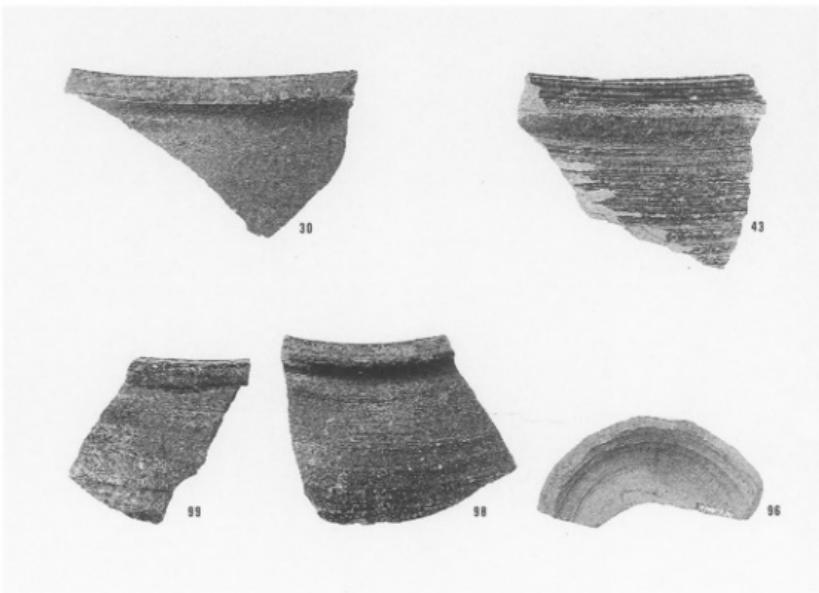
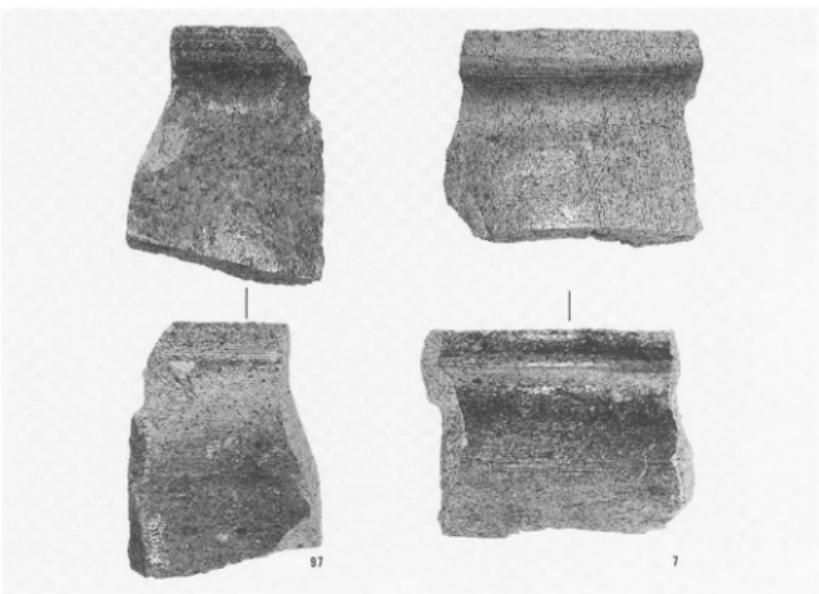
図版十二 遺物（土器）



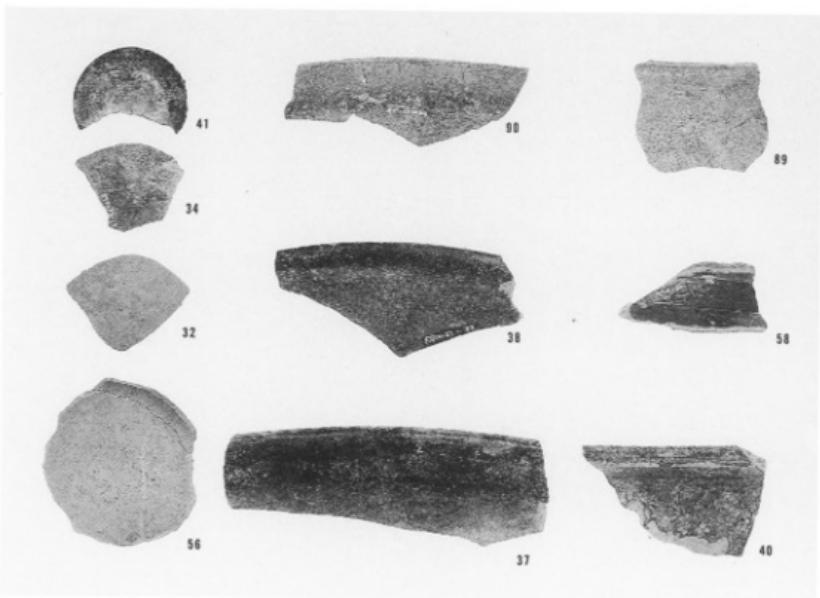
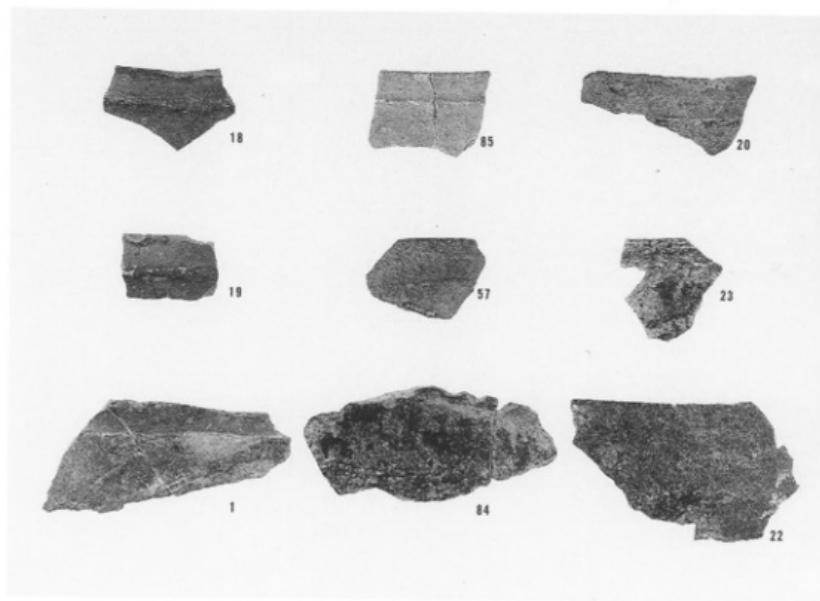
図版十三 遺物(土器)



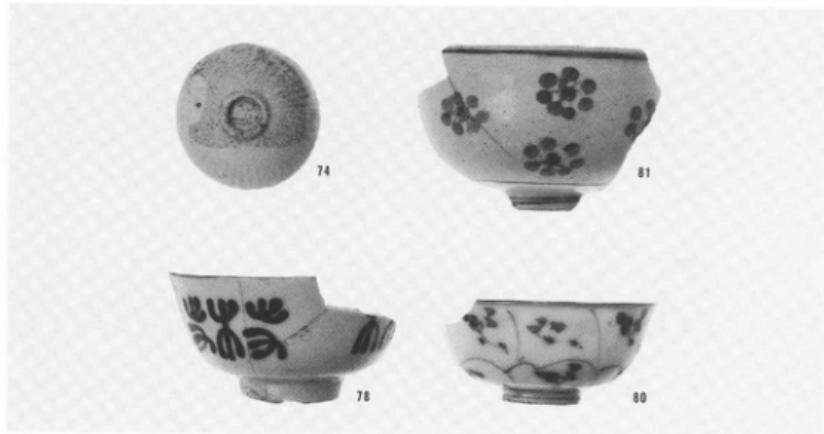
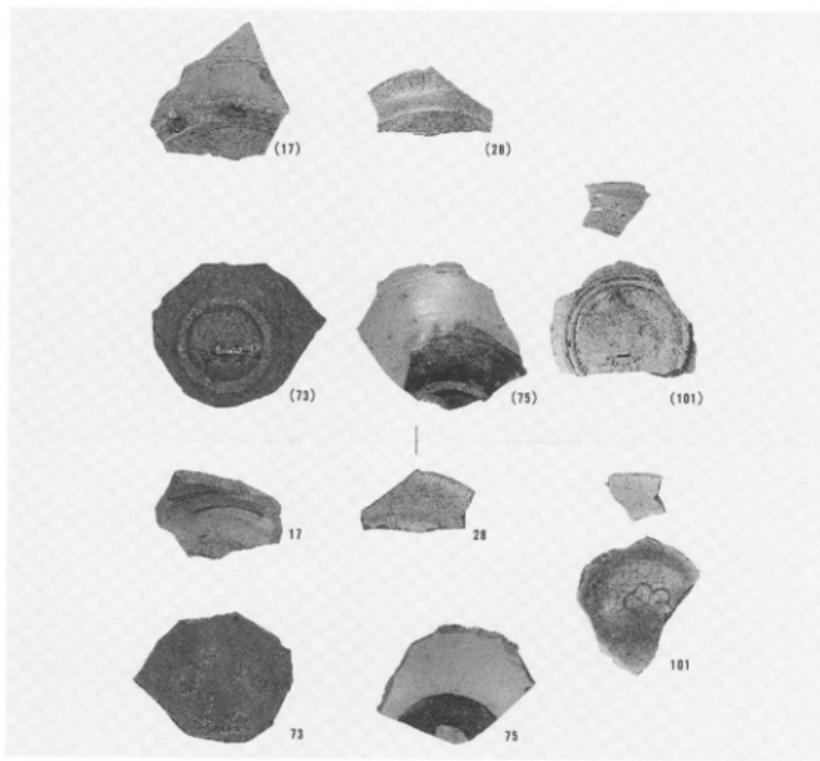
図版十四 造物(土器)



圖版十五 遺物（土器）



図版十六 遺物（土器）



図版十七 遺物（土器）



49



46



47



50



79



105



70



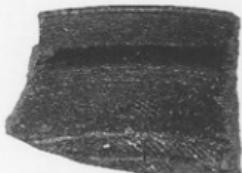
94



92



42



24



31



72



82



106



83



52



113



111



112



108



107



109



110



114

図版十九 遺物（石製品）



119



120



121

圖版二十 遺物(石製品)



123



124



125

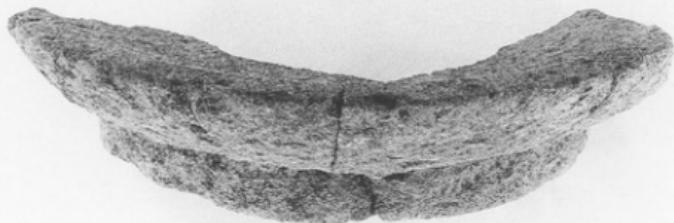
図版二十一 遺物（石製品）



126



127



128



129

圖版二十二 遺物（石製品・土製品・錢）



131



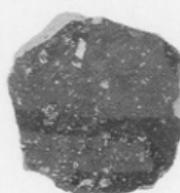
130



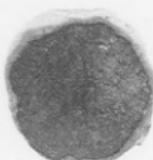
132



118



116



117



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142

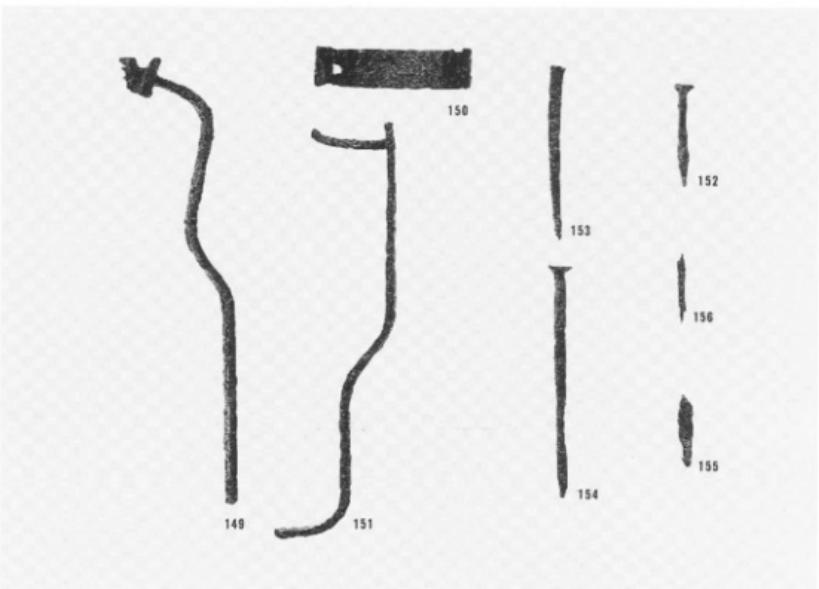
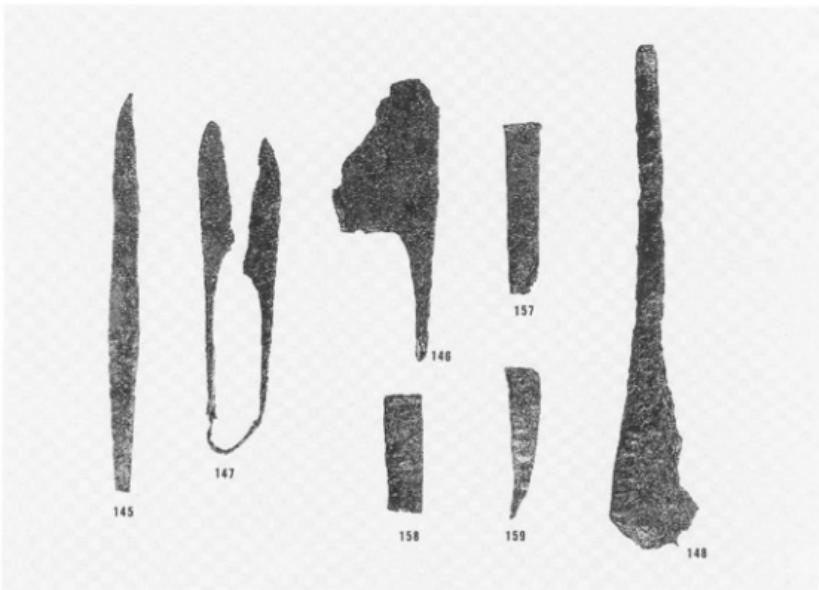


143



144

圖版二十三 遺物（鐵製品）



兵庫県文化財調査報告書第111号

一級河川加古川河川改修工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告

野 村 構 居 跡

編集 兵 庫 県 教 育 委 員 会

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会

埋 藏 文 化 財 調 査 事 務 所

印 刷 光 印 刷 株 式 会 社

平成3年度